
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ The Alone Vampire ~

Mitsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers～The Alone Vampire～

【Nコード】

N3665Q

【作者名】

Mitsuru

【あらすじ】

これまで友達も、自分の支えになる人すらいなく孤独を味わってきた。

人々からは避けられ、冷たい目を向けられ、殺されそうになる日々・

・
そして人々は彼をこう呼んだ 「この吸血鬼」と

時間が経つごとに人間が嫌いになっていく主人公、だが人々を救う管理局に入ることを決心する。

彼が求めているものは・・・先に待ち受けているものとは・・・
Magical Girl Lyrical NANOHA St
rikers } The Alone Vampire } beg
in.....

Episode 0 : Prologue (前書き)

初めましての方は初めまして、そして私の他の作品を読んでくださっている方はこちらにもよろしく願います。

作者の Mitsuru で御座います。

本作品は魔法少女リリカルなのは Strikers の二次創作であると共に、作者の妄想がタップリと濃縮されております。

そして気になる内容なのですが、原作と同じように進ませる予定ですが一部オリジナルが入っています。

後、デバイスの発言は原作と同じような雰囲気を出したいので基本英語で書いていこうと思います（作者の文法は完璧ではありません）。

英語が読めない、という方は心配ご無用！もちろん和訳を付けていきます。

それでは本作品を皆様に楽しんでいただけるように頑張っていきますのでよろしく願います。

魔法少女リリカルなのは Strikers ~ The Alone Vampire ~ 始まります

Episode 0 : Prologue

—— 孤独

兎は独りぼちにさせておくと死ぬと言われている人間は？

恐らく死にはしないだろう

ただあるのは、心の奥底から湧き出てくる負の感情……
芯から冷たくなつていき、凍つていく感覚に襲われる…

人が話し合い、笑い合い、泣き合い

その動作を僕はただ遠くから見つめるだけ
分からない………

—— 何で話し合う？

—— 何が面白い？

—— 何で悲しい？

—— 何で……… 僕は独りぼち？………

—— 何で僕だけ避けられ、物を投げつけられ、痛い思いをするの？

なぜ人間はこんな生き物なのだろうか

人種が違っただけで酷い目にあってしまう。

差別され、身近で起こった出来事は全て僕の責任………

そしてみんなはいつもこう言う

『またあの吸血鬼がいるぞ』、と

そんな…… そんな怖い目で…… 冷たい目で僕を見ないで……

僕はただ、友達が欲しいだけ

みんなと一緒に笑い合ってみたい、話し合ってみたい

ただ、みんなと一緒に――

『…… r…… r o…… B r o…… (…………い…………ん、

い……兄弟!!」』

「うつ、うつ……オルフィス」

『You alright? (大丈夫か?)』

「夢……」

手で涙ぐんだ目を擦り、さっきまでのことがすべて夢だったことを自覚する。
背中にはいやな汗がにじみ出っていて、来ているTシャツがその汗でびっしょりと濡れてしまっていた。

ピピピッ

寝起きで朦朧としていた中に突然通信が入ってきた。
相手は…… 部隊長のようだ。

「はい」

おお、起きていたかユーリ。 ちょっと今から来れるか?

「少し時間もられますか?」

急ぎつてほど急ぎの用じゃないから、いつもどおりマイペースでいい。 じゃあ待っている

通信が終わると、まだ起きたばかりで重たい体を無理やりにも持ち上げ、洗面台へと向かう。
意識をはっきりさせる為に冷たい水で顔を洗い、タオルで拭いてか

ら鏡で自分の顔を見る。

前髪が鼻が隠れるくらい長く、自分でもよくこれで周りが見えているなというほど長い。

後ろ髪ももちろんのこと腰くらいまで伸びているが、邪魔だと思ったことは一度もない。

最後に髪を切ったのはいつだろうか…？

『Bro，Let's go（行こうぜ、兄弟）』

ベッドの横に置いてあるカードから声が聞こえてきた。

時計を見ると部隊長からの通信が入ってから30分は経ってしまっている。

流石に長い間待たせるわけにもいかない。

「行こうか」

僕は黒と赤色のカードを胸ポケットに入れて部屋を出て行った。

Episode 1: Riot Force 6 (前書き)

プロローグだけだと不明な点が多いので早いですが1話だけ早めに更新です。

今回主人公のデバイスの発言がいつもより多めになっております、いつもよりかなり多めになっております、お客様(ry

↑ 一体作者は何を言っているのかw

ということと主人公のデバイスであるオルフィスの発言が多いので英文が多めです。

それでは本編スタートです

Episode 1: Riot Force 6

とある部屋の一角に二人の男の人影が見える。

一人は椅子に腰掛けモニターを眺めながら指を動かし、もう一人はさほど身長が高くなく綺麗な姿勢で立っており上官らしき人物が口を動かすのをじっと待っている。

そしてようやくその人の指が止まり顔を上げた。

「お前は明日から移動になり、機動六課に配属ということになった」

「そうですか」

「向こうの上官に会う前に髪を切っておくことだな、それじゃあちよつと失礼だぞ」

「考えておきます……………」

髪を切れと言われた理由は言うまでもなく髪の毛が『超』がつくほど長いからだ。

特に前髪が長く、目は完璧に隠れておりもう少して鼻まで隠れそうなくらい長い。

本人曰く全然邪魔ではないから問題ない、むしろ人に顔を見られないから良いや、ということらしい。

「報告は以上ですか？」

「ああ、以上だ」

「わかりました。これまでお世話になりました」

椅子に座っている男性、もとい部隊長に髪の毛の長い男性は浅く一礼し扉の方へと足を進めようと右足を１歩前に出したとき部隊長が呼び止めた。

「おっと、言いそびれたことがあった」

「なんでしょ」

髪の長い男性はその場で止まりもう一度部隊長の方を向きなおした。顔が髪でほとんど隠れていて表情まで確認できないが、恐らく無表情だろう。

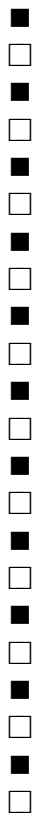
「人間すべてが悪いやつじゃない、これを心の中に入れとけよ。後、体につけてな」

「部長……あの件は他言無用でお願いします。管理局でも知っているのは極小数なんですから」

「ああ、わかっている。たまには顔を見せに来いよ？」

「……気が向いたらそうさせてもらいます」

「おう。元気でな、ユーリ・クロスフォード」



「ふう、疲れた」

さつきは部隊長に呼ばれたから行ってみたものの、まさか転勤だなんて。

それも機動六課？そんな部隊聞いたことがないな。

「オルフィス」

『What's up? (おう?)』

僕はポケットから赤と黒のカード状のデバイスを取り出しそれに話しかけると、そのカード状の物体から男の人の声が聞こえてきた。オルフィスはデバイスだけど僕の最初で最高の友達と言っても過言ではない。

「さっきの話聞いてた？」

『huh? (うん?)』

「いつも聞いてって言うてるよね？ まあいいよ、機動六課って聞いたことある？」

『Riot Force 6? hmmm, Never heard of it (機動六課? うん、聞いたことないね)』

やっぱりオルフィスもか……

最近結成されたばかりか、はたまた僕と同じように変わり者が集まっていると言うことかな？

取りあえず配属前にいろいろ下調べはした方が良いみたい。

「オルフィス、面倒とか言わないでちよつと頼まれてくれない？」

『Grrrr, You know what I'm too lazy... Can you just look up what you want? (ゲー、あのさ俺かなりだるいんだけど・・・自分で見たいもの勝手に見れないの?)』

「君の方が探すの早いでしょ？ それに僕はちよつと休みたいんだ、お願い」

『Fine Fine. So what information do you need about Riot force 6? (わかった、わかった。それで？ 機動六課のなんの情報があるんだ?)』

「全部……って言ったら？」

『I knew you gonna say that... It will take a bit while you know (なんとなくそうやって言うのわかったよ……… 少し時間かかるのわかってる?)』

「頼んだよ」

僕は制服からパジャマに着替えベッドへ移動する。

ちなみに時刻は夕方の3時前で寝るにはずいぶん早い時間だ。

まだ3時と言うこともあり外からは管理局員の気合いが入った声が響きわたっている。

この時間だ、恐らく体でも鍛えているのだろう。

ゆっくりとベッドに入り眠りにつこうとしたが、その気合いが入った声が響きわたるたびに体にある現象が生じ始めた。

声が響きわたると同時に体が異常なまでに大きく震えているのだ。それも一度や二度だけではなく、ぶるぶると何度もそれが続いている。

僕は声が聞こえてくるたびににあることを思い出していた。

僕を殺そうと追いかけてくる人間から逃げて、逃げて、逃げまくった日々……

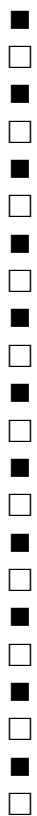
隠れて寝ようと思っててもいつ襲ってくるかわからないと言う恐怖から眠れない日々が続くのはざらだった。

「人間なんて…… 大っ嫌いだ」

僕は頭から上まで全部布団で隠した。

なるべく外の音を聞こえないようにしたいからだ。

「棺桶が懐かしい……」



『Hey bro, wake up! (おい兄弟、起きろ!)』

「ん……ん」

気がついたら完璧に寝てしまっていた。

布団を被ったままベッド脇に設置してあるスタンドランプのスイッチを探す。

だけど流石に布団を被ったままでスイッチがどこにあるかわからない。

すると隙間から明かりがこぼれてくる。

どうやらオルフィスがオートで電気を点けてくれたみたいだ。

時計を見ると早朝の4時を指していて、あと数時間で機動六課の寮へ赴かなければいけない時間だった。

『Ok, I can't believe you actually fall asleep while I was doing your favor (あのさ、人が用事してあげているときに寝てしまうとか信じられないんだけど)』

「ごめんオルフィス」

『Well anyway... I looked up for Riot force 6 (まあそんなことより、機動六課を

「はやてちゃん配属される、もう一人の人って？」

「うん、名前はわかつとるんやけどその他のデータがなくなてな」

「ユーリ・クロスフォード。これ見る限りわかるのは名前、性別、身長と後は顔がわかるだけみたいだね。でもこの身長ってなのはよりも小さいんじゃないかな」

3人の女性、一人はサイドポニーテールをしており、その右に金髪のロングヘアー、そして左にたぬ………じゃなくてショートヘアーの女性陣が機動六課に配属されるはずの人物を待っている。

「フェイトちゃんその身長のこととは本人の前で言ったらあかんで。それにしても年齢や素性までデータがないとなると………」

「怪しい？」

「でもあの伝説の三提督の方々が推薦したんだよね？ 問題ないんじゃないかな？」

サイドポニーの女性、高町なのはは頷いた。

「フェイトちゃん、ちょっと緊張してる？」

「うん。そんなはずないよ、この人保護施設出身みたいだし緊

張よりも、これからやっていけるかどうかのほうに心配かな」

「あはは、相変わらずフェイトちゃんは母性本能剥き出しやね」

この金髪のロングヘアの女性はフェイト・テストロッサ・ハラオウン、そしてショートヘアの女性は八神はやてだ。

「でも遅いな。もうすぐ時間やねんけど」

はやてがそう言うってから数秒の間にドアがノックされた。

恐らく扉の向こうで立っているのは、これから配属される不明要素が多い人物だろう。

「はやてちゃん」

「うん。どうぞ〜」

はやてがそういうと共に扉がスライドし、現れたのはデータに載っていた前髪がかなり長い人物、ユーリ・クロスフォードだった。

~~~~~

少しゆっくりだけど、時間的にはピッタシくらいかな。

マイペースで部隊長室へと向ったけど、あっという間に目的の部屋に到着してしまった。

中からは女の人の声が聞こえてくる。たぶんデータにあった人たちだろう。

「す……… はあ………」

扉の前で大きく深呼吸をして、少し高まってきた気持ちを抑える。そして気持ちが落ち着いてきたので、扉に手の甲を当て、ノックをした。

「どうぞ〜」

中から了承の声が聞こえたので、部屋の中へと足を進めた。

「失礼します。 機動六課に本日から配属になったユーリ・クロスフォード一等空尉です」

部屋の中に入り、まず一礼し簡単な自己紹介をする。

それから部隊長が座っているだろうデスクの方に目を向けると、早朝オルフィスが集めてくれたデータにあった3人の女の人が立っていた。

だがその女の人達を見た瞬間だった。

ドクン

「なっ!？」

心臓が破裂するのではないかと思うほど大きな鼓動を打った。  
そして体がむず痒くなってきた、思わずその場で膝を突きそうにな  
ったが何とか持ちこたえることができた。

彼女達は不思議そうな顔でこっちの様子を伺っている。

「だ、大丈夫か？」

「どこか痛いところでもあった？」

「大丈夫？」

異変を感じたらしい3人は僕の方へと向かってきた。

こ、これは…………

この感じはだめだっ！

こんな、こんなに『あれ』を欲しがることなんて今まで一度も…………

「こ、来ないでください!!」

大きな声を出して彼女達が僕のところへ来るのを止める。  
3人とも驚き立ち止まった。

「急に大声出してすいません、でも近づかないで下さい」

コンコンッ

訪問者が来たらしく、後ろからノックの音が聞こえる。

「ど、どうぞ」

「失礼します………… あっ！ 高町一等空尉、テストロッサ・ハラ  
オウン執務官、お久しぶりです」

「「うん？」」

「もしかしてグリフィス君？」

「はい！あれ、そこにいらっしやるのは……」

中に入ってきたのはメガネをかけた男の人で、どうやらこの人達のことを知っているみたいだ。

そして僕の顔を見ると、さらに驚きの顔をした。

「ユーリ・クロスフォード一等空尉」

何で僕の事を？

「グリフィス君、彼の事知つとるん？」

「結構有名ですよ？ 単独<sup>ソロ</sup>で数々の難易度の高い任務を遂行して成功させていて、確か通り名は……………」

この人、僕の通り名まで知ってる。  
もし口にしたら……………」

「吸血鬼」

「オルフィス………… セットアップ、バリアジャケットはいらない」

僕は胸ポケットからオルフィスを取り出しセットアップさせて刃が二枚ついている大鎌を出しグリフィスの首もとに押し当てる。グリフィス顔を引きつりながら手を上げて硬直してしまった。

「グリフィス君を離して」

「今の行っている行為は異常です、クロスフォード一等空尉」

後ろを向くと高町なのはとフェイト・テストロッサ・ハラウンが僕にデバイスを向けていて、いつでも僕を撃てるようにしていた。彼女達のことはオルフィスからみせて貰ったデータで確認している。優秀な魔導士と言うことも勿論知っている。僕は空いている手を高町なのは達の方に向けた。

『ブラッディー  
Bloody Spear』

向けた手の中に両端が尖った、長さ1m程の一直線の槍を魔力で構成させた。

その槍は人を殺した後のような血の色をしているが、これが僕の魔力色だ

「クロスフォード君取り合えず、落ち着こ？ なっ？」

「……………僕の気持ちなんて何も知らないくせに」

僕は誰にも聞こえないように呟き、大鎌と槍を下ろした。向こうも警戒しつつもデバイスを下ろす。

「……………先にロビーに行っておきます。失礼しました」

そこにいた人達を全員睨みつけ、部屋を出て行った。

髪が長いおかげで睨みつけたのは見えてないだろうけど、ついでに殺気も飛ばしてしまったからバレしてしまった可能性がある。まあ、そんなの関係ないけど。

『Bro, you ok? (大丈夫か、兄弟)』

「あの通り名を付けた人嫌いだ…… 呼ぶ人はもっと嫌いだけだ」

『Just forget about it man. By the way what happened when you get in? (さっきのことは忘れちまえ。そういえば部屋に入ったとき何かあったのか?)』

「あの人達の…… 血が飲みたくなつた。今まであそこまで飲みたいって思わなかったけど、体が思いっきり反応してた」

『Really (そうか……)』

「取り合えず行こう」

人となるべく会わないように気配を研ぎ澄ませながらロビーへと繋がる廊下を進んでいった。

ユリSide out

Episode 1: Riot Force 6 (後書き)

Mitsu「というわけで、第一話早めに更新しました」

ユーリ「作者も人間だったよね？」

Mitsu「そうだけど?・・・」

ユーリ「・・・ 大っ嫌い。 これで帰らせていただきます」

Mitsu「ちょ、ちよつと!! まだ早いよ!」

ユーリ「帰って寝たいんですが?」

Mitsu「もうちよつと友達言葉話せないかな?」

ユーリ「僕の友達はオルフィスだけです」

Mitsu「そんなこと言わずに・・・ ねっ? もう少しだけ」

ユーリ「・・・わかりました」

Mitsu「ふゝ、それで? あの三人の中で誰が一番おいしそうだった? 別に血って意味じゃなくて、女として・・・」

ユーリ「帰らせてもらいます。 失礼しました」

Mitsu「えっ!? じよ、冗談!! 冗談だって!! そ、それではみなさん感想、誤字お待ちしております! ユーリ、待って

「……」

**E p i s o d e 2 : I W a n t t o b e A l o n e (前書き)**

今回も疾風のごとく更新でございます

## Episode 2 : I Want to be Alone

「だ、大丈夫グリフィス君？」

「えらい目に合っでもたなあゝ」

両手を床ついて冷や汗をかいているグリフィスとそれを慰めようとするなのは、フェイト、はやての姿があった。

ここに配属となったユーリがグリフィスが言った何かに反応してちよつとした騒動になったのだ。

「死ぬかと思いました………… はッ！ 八神部隊長、ロビーに全員集まったことを伝える……………」

「おっしゃ！ ハプニング合ったけどこんなことで落ち込んだったら先には進めん！！ 気合い入れてこな、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「「うん！！」」

先の出来事を心の片隅にひとまず置いて、気合を入れなおす美女達三人 + グリフィスは部屋を出てロビーへと向かった。

ロビーに行くと六課メンバーが全員綺麗に整列していた。

ユーリも今回ばかりは流石にきちんと整列しているが何故か一番最後尾にいる。

## ユーリ Side in

こ、こんなに人が居るなんて聞いてない……………

僕は最後尾に整列しながらそんな事を考えていた。

しばらくすると先程の女の人達、あと吸血鬼と呼んできた人が入ってきて、その中の一人、八神はやてが号令と挨拶を始めた。

人混みが嫌いな僕は回りを警戒しながら彼女の挨拶を素直に聞いていた。

昔から人が多いところだと自然と体が周りの人を警戒してしまう。

「後一人紹介したい人がおんのやけど……………」

フォアードの隊長陣を紹介してから八神はやてがそんな事を言い始めた。

呼び捨ては流石にダメだと思うから、これからは八神部隊長と呼ぼう。

しかし誰だろう、僕は早く帰りたいのに。

「えーと、ユーリ・クロスフォード一等空尉。　こっちに来てもらえるかな？」

……………正直な話し、予想はしてたけどさ。

「は、はあ……………」

口から思わず生半可な返事が出てしまう。

帰れると思っていたけど急な出来事なので少し驚いたけど表情には出さなかった。

言われたとおりに前に出て部隊長である八神はやての隣に並ぶ。やはりここからだ、機動六課のメンバーの顔がよく見える。もちろんひそひそ話も……

「さっきユーリ・クロスフォードって言ったか？」

「ああ、俺もそう聞こえた」

「ということは、うわさの……」

僕はうわさをしている人たちを睨んだ。

僕の噂話をしている人たちは僕が睨むと話をやめて目をそらした。気分が悪い……

「この人は別部隊から配属になったユーリ・クロスフォード一等空尉。一応フォアードということ何やけど、単独行動やからスターズとライトニングとは別部隊になります。クロスフォード一等空尉なんか一言お願い「いえ、僕はこれで失礼します」 えっ？ ちょっ」

僕は八神部隊長が言い終わる前にロビーを後にした。

後ろから1人…… いや3人の足音が聞こえてくるが、気にせずに用意された男子寮へと歩いていく。

「ちょっと待って!!」

後ろを振り向くと八神部隊長、高町一等空尉、ハラウン執務官が追いかけてきていた。

「ごめん、うち何かへんな事言った？ 言ったんやったら謝るから……」

「いえ、特に何も」

「そやけど……」

「それだけですか？ 自分ちょっと気分悪いんでこれで失礼します」

気分が悪い………のではなく性格には機嫌が悪い。

さつきされていた僕の噂なんて、どうせ吸血鬼がどうだこうだとかそんなことだろう。

僕が本当に吸血鬼だと知っているのは一部の人だけだけど、たとえ通り名でそう言われても気分が良いものではない。

僕は3人に一礼し、再び歩き出した。

「あつ、クロスフォード君！」

高町一等空尉が服の裾をつかんでき、またあの反応が体中をめぐるた。

ドックンドックン

「ッー!!」

またこれだ………

血のいい香り………

今すぐその綺麗な首筋に噛み付いてゆっくりと………

意識が一瞬飛びそうになるが、オルフィスが僕の体の異変に気づき声をかけた。

『Broo!!（兄弟!!）』

「はッ!! さ、触らないでください!」

「キャッ!!」

「「なのは（ちゃん）!!」」

我に返った僕は勢いで高町なのはを押し返してしまい、彼女は地面にお尻をつけてしまう。

お尻を擦りながら起き上がり、僕の方を見つめてきた。

「クロスフォード君…… どうして……… なんで………」

「親友にここまでされたら、いくら私でも黙ってられないよ? クロスフォードさん」

高町一等空尉に寄り添う八神部隊長に対しハラウン執務官は僕を睨んで来た。

そして僕の方へと近づいてきて、手を上げた。僕の頬に向かって。でも僕はそれを簡単に受け止めが、ハラウン執務官の手を掴むと同時に、

ドックンドックンドックン

手を置かなくても心臓の鼓動が尋常ではないほど脈打っているのがわかった。

突然来るこの発作。　こんなに苦しいなんて……

『Hey! you guys stop!! He doesn't feel well right now! Leave him alone!! (おい! いい加減にお前達やめろ! 兄弟は今調子が良くないんだよ! 一人にさせやがれ!!)』

オルフィスが彼女達に向かって怒鳴った。

しかしハラOWN執務官は僕につかまれた手を退かそうとはしない。

「あなたは……　何で……」

「いいんです。　嫌われることには慣れてますから」

「えっ?　クロスフォード君今なんて」

僕はぼそつと呟いた筈なのに高町一等空尉には聞こえたらしく、不思議そうな顔をしている。

つかんだハラOWN執務官の手を無理やり下ろさせて、僕は彼女達に背を向けた。

「八神部隊長」

「な、何や?」

「後からちゃんとフォアード陣の練習は見に行きますので………それだけです」

「そ、そか。　よろしゅうな」

僕は自分の部屋へと足を進めた、罪悪感を背中に向けながら……

ユリSide out

なのはSide

「大丈夫なのは!？」

クロスフォード君が見えなくなってからフェイトちゃんが私の所へと走ってきました。

私の体を触りどこも異常がないか確認し、異常がないことを確認するとホッとしたような顔を見せるフェイトちゃん。

「でも、彼なんかあるんやろか。顔は見えへんけど悪い人には感じへんのやけどな」

そう、私もはやてちゃんと同じ意見。  
それに最後に言っていた、嫌われるのには慣れているって……

「私も手を上げたのは間違ってたのかも……… なのはが尻餅ついたとたんに頭に血が上っちゃって………」

フエイトちゃんも自分がした行動に誤りがあったことを自覚した。私も無理やり彼を止めようとしちゃったし……

それに私が袖を掴んだとたん急に苦しそうにしていたのは気のせいなのかな？

後からフォアードの訓練には来てくれるみたいだし、謝らないと

「なのはちゃん、もうそろそろ訓練の時間やない？」

「うん、もう行かないと。　ありがとうフエイトちゃん、はやてちゃん」

「ええんよ、気にせんというて」

「本当に大丈夫なのは？」

「大丈夫。　ねえ、ちょっと二人とも耳かして？」

フエイトちゃんとはやてちゃんは顔を見合わせてから私の方に耳を寄せました。

「えーとね。　今日の訓練が終わってから――――  
……　　どうかな？」

「そやね。　うちも頑張つてそれまでには仕事終わらせるわ」

「うん、私もさっきのこと謝りたいし」

二人とも私の意見に納得してくれたみたい。

クロスフォード君、訓練終わってからちゃんというのかな？

ううん、絶対にいる……　　と思う……

アイデアを出したのに急に心配になってきました。  
な、なんとかなるかな？

なのはSide out

ユリSide

自室に戻り体調を万全にさせてから、先ほど八神部隊長に伝えた通りに訓練場へと向かった。

訓練場につくとフォアード陣がすでに練習を始めていて、4人がガジェット・ドローンを追い掛け回している。

どうやら本番に近い形の練習をしているようだ。

「オルフィスあれって……」

「Hmmm seems like it's nearly there alone (ふむ、見た感じ本物に近いみたいだな)」

やっぱり。

でもなんだかんだ言ってゆっくりだけど徐々にガジェットを倒していく訓練生4人。

そしてついに最後の一体を破壊して練習は終了した。

『They doing pretty well aren't they? (なかなかやるなあいつ等)』

「予想以上に出来る。特にあのオレンジ色の髪の子なんてかなり頑張ってるね」

僕がオルフィスにそう返答しているときだった、後ろから気配が一つ僕の方へと向かってきた。

『Watch your six bro (6時の方向に気を付けるよ)』

「うん、もう気がついてるから大丈夫」

そしてその気配の人は僕の隣へとゆっくり歩いてきた。

予想は出来ていたけどやっぱりこの人だった。

サイドポニーの女の人、高町一等空尉。

「どう………かな? なかなかいい人材と思うんだけど」

「……………」

「クロスフォード君はあれくらい余裕?」

「……………」

僕は口を開かなかった。

いや、正確には開きたくなかったんだ。

「ねえ……………どうして何も言ってくれないの？」

僕は彼女よりも少しだけ背が低い。

だから高町一等空尉は少しだけ腰を曲げて僕の顔を覗き込むようにして見て来た。

「前髪…………… ちょっと長いかな？ どう、私が切るって言つのはだめ？」

「…………… 遠慮しておきます」

そついうと彼女は僕の前髪をどかして笑顔を作った。

このときはなぜかさっきのような発作は起こらなかったが、反射的に彼女から目を逸らす。

「ほーら、こっちの方がカッコイイと思うよ？」

「…………… カッコイイ、カッコ悪いなんて関係ありません。 僕の所にいるより早く訓練生の方へ行つてあげたらどうですか？」

「ううん。 後はシャーリーに任せちゃったから大丈夫だよ」

シャーリー？ データにあったシャリオ・フィニーノ一等陸士のことか。

「……………」

僕はまた黙ってしまった。

ここは黙ってやりすごそうという魂胆だ。

「ねえ、クロスフォード君。ご飯まだだよね？」

「……………」

「まだだよね？」

「……………はい、高町一等空尉」

思わず答えてしまった、いや、無理やり答えらされたの方が合っているのか。

そう答えると、彼女はまた笑顔を作り、

「なのは、でいいよ？」

「……………あの、放っておいてくれませんか？ 高町一等空尉」

「な・の・は」

「……………いい加減にしてください、高町一等空尉」

「練習しよつか。ほら言ってみて？ な・の・は」

なぜ、こんなことに……………

人間はよくわからない

特に女の人なんて一体何がしたいのかよくわからない。

正直ここまで近づいてくる人は彼女が初めてなのかもしれない。

「……………やってられません。失礼します」

僕はそれだけ言い残すとまた自分の寮へと戻ろうとしたそのときだった。

「あつ！ 待ってそっちじゃないよ」

ムニユ

「…………… 一体あなたは何をしたいらっしゃるのでしょうか」

「えっ？ ご飯につれていくんだけど、だめかな？」

「一人で行きます。 と言うより一人にさせてください」

現状を説明すると高町一等空尉が僕の腕を抱き抱えている。

大きくも小さくもない胸の谷間の間に僕の腕が挟まってしまっているのだから、そんなことはどうでもいい。

それよりも血が飲みたくなる発作が起こらないかの方が心配で仕方がなかったが、この時も起こらなかった。

自分でもどのタイミングで起こるのか検討がつかない。

「だゝめ。 今日から同じ機動六課って言う同じチームに入ったんだから今のうちに分かち合っておかないと」

高町一等空尉は無理やり僕を引っ張り、食堂へと向かう。

は…………… 他の人がいなくなってから一人で食堂でご飯を食べようってスケジュールが台無しに

「させないけどね」

自由が奪われた腕を無理やり奪い取り自由を取り戻した僕は走って

寮へと戻っていった。

「待つて！ クロスフォード君！！」

後ろから高町一等空尉の声が聞こえるが見向きもしない。

何とか無事に寮にある自分の部屋にたどり着く事ができひとまず安心した時だった。ドアがノックされる音が聞こえてきた。

「まさか……………」

僕はゆつくりとドアを開けた。

そこには予想外の人物が立っていたのだった。赤髪の男子、たしか名前はエリオ・モンディアルで階級は三等陸士。彼は少し怯えながいるようだ。そりゃあそうだろう、さっきあったロビーでの僕の振る舞いを見たら誰だってこうなってしまうだろう。

でもここまで勇気を出して僕の部屋に来たのだから、重大な用があるから来たに違いない。

「あ、あの………… ユーリ・クロスフォード一等空尉であっていますか？」

「………… はい」

「自分はエリオ・モンディアル三等陸士です。 あの………… よろしければ一緒にご飯をと思いましたので」

「ご飯？」

「何で僕なんかを…………？」

きつと昔の僕なら躊躇なく顔を縦に振っただろうが、今はもう違う。

興味がないと言っても過言ではない。

しかし高町一等空尉といい何故僕なんかに構おうとするのだろうか。

「すみません、僕は遠慮させてもらいます。今からやることがあるので」

「そ、そうですね…………… 申し訳ありません。これで失礼致します！」

大きな礼をするとそのままその場を立ち去ってしまった。僕はさっき嘘をついた。

やることがあるなんて嘘で、実際の所用事もない。それから数時間後、誰も食堂に居なそうな時間を見計らって食堂へと向かった。

案の定誰も居なく、居るのは調理係のバックスタッフのみだった。僕は適当な物を頼み食堂の一番端の席へと座る。

そして席に座ると同時に食堂のドアが開く音が耳に入った。

「こんな時間に誰だろうね、オルフィス」

僕は先程頼んだ鮭のおにぎりを口に一口運んでオルフィスに聞いた。

『Let me guess... I think that ladies here (予想しようか…………… 多分、あの女の人等じゃね?)』

「やめてよ、そんなありもしない…………… こと……………」

僕は入ってきた人達を見た瞬間に言葉を失い、そのまま何も見なかったように目をそらし顔を隠した。

なんとオルフィスの予想が的中してしまったのだ。

## Episode 2 : I Want to be Alone (後書き)

Mitsu「おいおい、子供の誘いを断るとか何事だよ・・・」

ユリ「僕は一人でいたいんです」

Mitsu「お前はどこの引き籠もりですか？」

ユリ「引き籠もってなんていません。ただ人気がないところで静かにしてただけです」

Mitsu「どうか・・・ そんなこといつて隠れて女の子達を・・・」

ユリ「オルフィス・・・」

オルフィス『Don't kill him bro (彼を殺すなよ？兄弟よ)』

Mitsu「お、落ち着いて、落ち着くんだ!! ぎゃあああああ  
あああ」

ユリ「無駄な手間を・・・ 感想、誤字なんて待っていませんよ？  
本当ですからね」

Mitsu「何・・・言ってるんだ・・・ お前は・・・ 待って・・・  
ます・・・ がくつ」

### Episode 3 : I am a Vampire

はあ、今日は厄日だ…………

僕の前の席、そして僕を挟むように左右にあのお三方が座っていてずっと僕に話しかけてきている。

もちろん僕はずっと無視しているフリをしているけど、それでも向こうは笑って話しかけてきていた。

人が質問に何も返答しないのによくずっと話しかけてくれるよね。きっと僕なら途中で挫折するだろうけど。

「それでクロスフォード君は強いん？」

「はやてその言い方は失礼だよ。あの三提督の推薦で来たんだよ？」

「でもフェイトちゃん、それだけの理由だとわからないよ。データにもちゃんとしたものが載っていないし、本人にちゃんと聞いておかないと………… 今後の任務に支障が出てきてしまうかもしれないしね」

せつかく一人でゆっくり食事が出来ると思っていただけ、これじゃあゆっくりできる以前の問題だ。

我慢が出来なくなったので僕は立ち上がり別の席へと移動を試みるが、

「どこ行くの、クロスフォード君？」

「ほら、まだごはん食べ終わってないから、めっ、だよ？ ちゃんと食べ終わってから」

「そやね、クロスフォード君。立ち歩いて良いんはちゃんとご飯を食べ終わってからな？」

恐ろしいことに、僕が移動することを予想していたかのかどうかはわからないが僕が立ち上がると同時にこの3人は僕の服をいっせいに掴んできた。

八神部隊長なんてテーブルの上からわざわざ腕を延ばし服を掴んできています。

それにこの人たち、僕が少し背が低いからって子ども扱いしてきている……

「それにしてもクロスフォードさん髪長いね？」

ハラオウン執務官が唐突にそんなことを言い始めた。

「あつ！　そうそう。二人ともこれ見てみてよ」

高町一等空尉が僕の前髪をどかして僕の顔を二人に見せる。

本日2回目の僕の素顔披露……滅多に見られることのない僕の素顔が2回も見られてしまった。

一応言っておくけど僕の素顔を見れるなんてラッキースケベ並にラッキーなんだよ？

「へー、そんな良い顔もつとるんや。そやのに前髪で隠しとるなんて勿体無いな」

「うん、私も切ったほうがいいと思うな。ほら、イメージアップにもつながると思うし」

ハラオウン執務官まで僕の髪をいじり始める。

高町一等空尉、そしてハラオウン執務官は僕の髪型をどうするか迷い始め、八神部隊長までもが会話に参加してしまった。

「よしっ！　じゃあ今から私とフェイトちゃんの部屋で髪切ろうか」

「……………はい？」

カミノケヲキル……………　ダッテ……………？

「うん。　なのはに髪の毛を切ってもらえるなんて滅多にないよ？」

「ほらほら、クロスフォード君かつこよくなっておい」

ちよつと……………　勝手に話を進めてもらっても困るのですが……………  
と言うか今更だけこの人たちなんでこんな時間にご飯食べに来てるの？

後、髪を切るとか明らかに僕の行動を監視してたよね？  
タイミング良過ぎるでしょう。

「よし、それじゃあ行こうかクロスフォード君」

「なのはそつち持つて」

「あつ、なのはちゃん、フェイトちゃん。　食器はうちに任せといて？　ほんなら行つてらっしゃいクロスフォード君」

高町一等空尉とハラオウン執務官は僕の両腕をしっかりと掴み、そして持ち上げた。  
それもいいとも簡単に。

そして席に残った八神部隊長はと言うと、テーブルの上でニコニコしたまま僕が食堂を出て行くのを見守っていた。

「・・・いやです」

「だめだよ、我がまま言っちゃ」

「ちゃんとなのはママがついていてあげるから、大丈夫だよ？」

なのはママってなんですか・・・

あなたの子供になった覚えは微塵もないのですが

僕は両腕を拘束され、そのまま部屋へと連行された。

「うーん、こんな感じかな？」

「なのは、もうちょっと・・・ うん、いいと思う」

拒否権すら使えなかった僕は無理やり髪の毛を切られた。

もうそれは説明できないほど、ざっくり！！ って感じで切られたよ。

もう目を隠すことすら出来ないくらいの長さになり、全体的に大分短くなってしまった。

今の心境は、と質問されると僕はきつとこう答えるだろう。

―― 部屋に1年ほど引き籠もりたいです。

または

―― もういつその事殺してもらって構いませんでしょうか？

と答えるだろう。

そして改めて思ったことは・・・

人間は怖い！！ （主にこの二人 + 八神部隊長）

「どうかな、クロスフォード君？」

「・・・死にたいです」

「あ、あはははは・・・」

何度も鏡で自分の髪を確認するが、やはり髪はぱつぱつと切られており今までの僕の面影がない。

これが・・・自分？

と思うほど変わってしまった。

するといきなりハラOWN執務官が僕に頭を下げた。

「ごめんなさい！！」

彼女は何を言っているのだろうか。

髪の毛のことならすでに諦めがついているし、時間が経てばまた伸びてくるからもう気にしていない。

「・・・なんのことですか？」

「私・・・ クロスフォードさんに手を上げてしまって・・・」

なるほど、僕が高町一等空尉を突き飛ばした時のことか。

「いいですよ、もともとあんな弱弱いビンタなんて喰らうほど僕は落ちつづれてはいませんし、あれは僕のせいですし」

そんなことよりも、一刻も早くこの場から離れたい・・・ と言うより走り去りたい。

「ねえ、ユーリ君？」

高町一等空尉がクロスフォード君から呼び名をユーリ君に変えていた。

ユ、ユーリ君？

誰が、いつ、どこで、何時、何分、何秒にそう呼んでいいと許可したのですか？

「私達に隠し事してない？」

「・・・どうしてそんなことを？」

「嫌われるのには慣れている。 ユーリ君が言った言葉がどうしても気になって」

なるほど、そこから予測されることは僕の過去、あるいは何かを隠している、につながると言うことに気がついたというわけか・・・

流石・・・と言つべきなのか？  
それとも厄介と言つべきなのか・・・  
僕は自分の過去を話すつもりはない。

「さあ？ どうでしょう。 仮に隠していたとしても僕は話しませんよ」

僕の過去を知って何になる？

人の過去なんて探しても出てくるのは・・・

ただ言えることは僕のことを避け始めるに決まっている。

そんなことになるくらいだったら今の方が『ずっとましだ』。

えっ！？ 今僕なんて思った？

ずっとまし？・・・

「ユーリ君？」

「あつ・・・ はい？」

「もう、話聞いてなかったでしょ？」

「すいません、ちょっと考え事を」

「もしかして私達にどう話そうか考えてくれてた・・・とか？」

ハラウン執務官が僕の頭を子供をあやすかのように撫でながらそう言った。

さっき反省したかと思つたらまたこれですか・・・

だから僕は子供じゃない・・・

「まさか・・・。その前になんで僕の頭を撫でる必要があるんですか？」

「えっ！？ あっ・・・ ごめん」

名残惜しそうに僕の頭から手を退かすハラOWN執務官。

「もういいですよ？ 僕はもう戻ります」

「だめだよ、ユーリ君。 子供がこんな時間に外を歩いたら」

だ・か・ら、なんで子供？ 意味がわからない？ この男の人にとつては少し小さめの背が悪いんですか？ 悪いんですよ？

時計を見てみると確かに普通の子供なら今頃、夢の中を駆け足で走っているだろう。

でも僕は子供じゃないからそんなのは関係ない。

「あのですね・・・ 僕は子供じゃありませんし、仮に無理だとすればどうすればいいんですか？」

高町一等空尉とハラOWN執務官は顔を見合わせ、そして頷くと、

「もちろんここで寝るんだよ・・・」

………… いやです。 ただえさえ2人といるのがいやなのに寝るなんてことは絶対に無理です。

あなた達と寝るくらいならいっそう廊下で丸くなって寝たほうがマシですよ。

しかし女の人と言うものは男の人と共に行動するのが嫌いなものだ  
と思っただけで、一体どういふことなのだろうか。

ほ、ちゃんと元気そうにやってるみたいだな。 ユーリ

突然どこかで聞いたことがあるような声がした。

いつの間にかモニターが開かれており男の人の姿が映りだされている。

「いい所に来てくださいましたロイド部隊長」

ロイド部隊長

管理局の中で僕のことを知っている人物の一人。  
そして前にいた部隊の部隊長をしている。

「やっぱり僕は慣れることなんて無理ですよ」

何を言っているんだ。 おっと、俺はロイド・アンドリューだ。  
会ったのはこれが初めてか高町一等空尉とハラOWN執務官。噂は  
かねがね

ロイド部隊長が敬礼すると共に二人も敬礼する。

「それで・・・？通信をしてきたと言うことは何かようがあるんで  
すよね？」

《まあな。 お前あの事は話したのか？》

「何を言っているんですか、話すはありますかありませんよ・・・」

《そうか。では悪いが俺の口から話させてもらっ》

「なっ!？」

一体どうして!？」

「ちょっと待ってください。それはどういうことですか」

あの三提督から言われたただだから気にすんな。まあもう八神  
部隊長には話した

ナ、ナンダッテ・・・

「わ、わかりました・・・三提督様のご判断なら納得します。  
しかし理由は？」

まあ、せつかくの部隊だ。お偉いさん方もお前にいろいろとチ  
ヤンスをやってるんだろう

はい？

意味がわからない。

チャンスというのはこの『恐怖』という言葉がお似合いの三人方と  
いろいろ行動を共にするということなのか？一体何がチャンスな  
のかよくわからない  
でも三提督様達にはお世話になったから反論するわけにはいかない。  
向こうが決定したのなら、僕は口出ししないよ。

まあ、と言うことでユーリが隠してやることを教えてやろう

高町一等空尉とハラオウン執務官は頷き、ロイド部隊長の言葉を待

っ。

そしていよいよ僕の秘密が彼女達にばれてしまった。

ユーリ・・・ ユーリ・クロスフォードは・・・ 吸血鬼だ

### Episode 3 : I am a Vampire (後書き)

Mitsu「お前明らかにチャンスだろ！」

ユリ「一体何がチャンスなのかわからないのですが・・・」

Mitsu（そりゃあ、人間と仲良くなるチャンス？w）

ユリ「そういえばもうそろそろ原作どおりに行ってはどんなんですか？」

Mitsu「あゝ、そのことなんだけど恐らく次くらいで入るね。

FW陣達の訓練も丁度入りそうだし」

ユリ「はあゝ。最近ため息しかついていないような気がしますよ」

Mitsu「それこそ意味がわからないよ。ほらよかつたじゃん、人間と仲良くできるチャンスができたんだから」

ユリ「知りませんよそんなこと。もといまったく興味がありません」

Mitsu「ふっ・・・よく言っぜ・・・感想、誤字待ってまゝす！」

## Episode 4 : About . . . Me . . . (前書き)

純騎士の更新を放置してこっちを更新してしまう . . .

## Episode 4 : About . . . Me . . .

《ユーリ．．． ユーリ・クロスフォードは．．． 吸血鬼だ》

ついに事実を開かしてしまうロイド部隊長。

高町一等空尉とハラOWN執務官はロイド部隊長が何て言ったか最初は理解していなかったが少しすると二人でユーリに顔を向けた。目が若干点になっている。

まあ．．． そうだね。

「吸血鬼ってあの．．．」

「本の中で出て来る、人の血を吸う．．．」

高町一等空尉の言葉に続くようにハラOWN執務官はそう言う。

僕はなんとも言えない心境の中、モニターに映るロイド部隊長を見続けた。

そして偶然目があってしまったので目をそらしてしまう。

《そこに本人がいるんだ、後はユーリから聞いてくれ。じゃあ健

## 闘を祈る》

ロイドは通信を切り、残ったのは無言のまま立ち尽くしている僕、高町一等空尉、ハラウン執務官だけ。部屋には時計の針の進む音しか聞こえていない。

『Bro・・・（兄弟・・・）』

心配そうに僕に声をかけるオルフィス。

わかってる・・・

緊張しながらもそこにいる二人の方を見て、口を開いた。

「そう・・・僕は吸血鬼。本の中の様に確かに血を吸います。いつ、どこで生まれたかもわからず、長い時間生きてきました」

自分でもおかしいと思う。

いつ生まれたかも本当に知らない。

気がつけば僕は嫌われ、人々から避けられる存在になっていた。そしていつしか殺されそうになっていたのだ。

町に入ると刃物を持った人たちに追われ、僕が町から出て行くまでずっと追ってきた。

向こうは殺す気で来ていて僕はその人たちから必死に逃げ回るだけ

で精一杯だった。

ただ休まるのは誰も近寄らなくなった墓場で、僕が勝手に墓荒らしをして見つけた棺桶の中だけ。

そこから一步外にでると悲惨な世界が待っていた。

食糧はどうしていたかと言うと・・・血を飲んでいた。

ただし人間の血は一切飲まなかった、いや、人間を避けていたから飲めなかったと言う方が正しいのだろう。

動物に近寄り、その血をすすっていた。

血を飲む際には僕は歯を立て、その動物の皮膚にかぶりついた。

でも飲むと言っても極少量であり、血を飲んだ時に出来る傷は数分で治るし相手に痛みもない。

だいたいお猪口一杯分ですばらく何も食べなくても生きていけるくらいだ。

「そしてある日だった・・・」

僕が血を飲んでいるところをたまたま通りかかった人達が見てしまつて、そこから僕にとつての本当の地獄の始まりだった。

血を啜っている姿を見た町の住人は急いで町に戻り、他の住人たちにも知らせ、そしてあつという間に広がってしまった。

内容は、

『吸血鬼がいる』

吸血鬼がいる・・・

その言葉のみが広がった。

そしてそれが誰かと言えばその町で毛嫌いされている人物だと知らされる。

その人物はもちろん僕で、さぞ殺しやすい人物であったことだろう。すぐに吸血鬼を殺す親衛隊のようなものが作られ吸血鬼狩りが始まったが、僕は見つかったすぐにそこから離れ遠くの場所へと移動していたから助かっていた。

「それでユーリ君は・・・」

「それから時間が経ち、とある別の町で座り込んで死を待っているところを助けられたんです。それが、伝説の三提督と呼ばれるうちの一人、ミゼット提督でした」

大体の説明は以上。

これで彼女達は僕のことを避けるはず、なんせ本当に吸血鬼が目の前にいて血を吸うのだから避けないほうが逆におかしい。

「・・・ それでは僕はこれで失礼します」

「う、うん・・・」

「お、お休みなさい。クロスフォード……さん」

ほら、さっきの話を聞いて僕に対しての対応が少し変わった。わかっていた・・・

だから僕は管理局に入ってから一人で任務をこなして、ここまでできた。

もちろん、これから・・・

その場で石のように固まつた高町一等空尉、そしてハラオウン執務官に背を向けその場をあとにした。

~~~~~

ドガアアアアアアアアアン！！

爆発音と共に煙が巻き起こる。

そう、僕はフォード陣達の早朝訓練を見に来ているのだ。

メンバーはもちろん前回と同じ。

オレンジ色の髪で強気の少女、ティアナ・ランスター。

ショートカットのボーイッシュな少女で、明るく活発なスバル・ナカジマ。

夜ご飯を誘ってきた少年、エリオ・モンディアル。

そして最後にピンク色の髪で本当に魔導師なのかと思ってしまうおっとり少女、キャロ・ル・ルシエ。

「本当に頑張ってる。高町一等空尉が相手なのに最後まであきらめずに喰らいついてる」

今フォアード陣がやっているのは「シュート・イヴェーション」。

5分間高町一等空尉の攻撃から逃げきるか、彼女に一発ぶち込むかのどちらか。

しかし今のフォアード陣は、すでに前の訓練で体力がほとんど削られていることから5分間逃げ切ることを選ばずに一発高町一等空尉に入れることを選んだらしい。

ナカジマ二等陸士が魔力弾に追われるやら、ランスター二等陸士がデバイスの不調で援護に遅れるなど危ない面が多々あったが・・・

『Looks like they gonna finish it next (どうやら次で決めるみたいだな)』

モンディアル三等陸士とルシエ三等陸士が影から隙について、着々と準備を始めている姿が見えた。

あの体でよくここまで・・・と思わず感心してしまう。

「我が乞うは、疾風の翼。若きそう槍騎士に、駆け抜ける力を」

『Boost Up・Acceleration・アップ・アクセレーション』(ブースト)

補助魔法によりモンディアル三等陸士のデバイスが新たな光を帯びる。

そしてランスター二等陸士とルシエ三等陸士の竜であるフリードの攻撃によって高町二等空尉は攻撃進路へと誘われてしまい、

「いっけええええ！」

モンディアル二等陸士はデバイスと共に高町一等空尉に飛んでいき、衝突した。

「うわあああああ！！」

衝突と同時に巻き起こった煙の中からモンディアル二等陸士が吹き

飛んでき、地面を滑るかのように着地する。

「エリオー!」

「外した!？」

煙が晴れてきて、見た感じ無傷の高町一等空尉が現れた。
無傷と思われたが、

『Mission complete (ミッションコンプリート)』

『

デバイスのレイジングハートからそんな声が聞こえてきた。
どうやら直撃したみたいで、高町一等空尉のバリアジャケットには
バリアを貫いて直撃した痕がくつきりと残っている。

「と言うことで、今朝はここまで。 いったん集合しよう!」

高町一等空尉の号令と共に、にこやかな笑みを浮かべながら集合する
フォアード人達。

『So... Bro you gonna... (んで...』

兄弟・・・」

「はあ、あれやらないとだめなの？」

『Of course dude（当たり前だろ）』

そう、実は昨晚あのとロイド部隊長からプライベートチャットが来たのだが、その内容があまりにも恐ろしい内容だったのだ。

その内容とは

『明日、フォアード陣の練習があるそうじゃないか。
そこで必ずフォアード陣、または可愛い子猫ちゃんと最低1回は話
せ。これは命令だ！！ 以上 』

僕を殺す気ですか・・・

なんだか目から汗が出てきそうだよ。

それに可愛い子猫ちゃんって誰ですか？

「仕方がない・・・ 取りあえず行こう」

僕はビルから飛び降りてフォード陣の後ろに着地した。
フォード陣はビックリして地面から20cmくらいジャンプして
いた。

「「「「ユーリ君（クロスフォード一等空尉）！？」「」「」

高町一等空尉を含め全員が一斉に僕の名前を呼んだ。

「・・・はい」

「ユーリ君、なんで？ どうしてここに」

「ランスター二等陸士とナカジマ二等陸士、デバイスが無理しすぎ
てるみたいですが」

高町一等空尉の質問を無視して用件だけを言う。

「「あっ・・・」」

二人は自分のデバイスを急いで取り出す。
ナカジマ二等陸士に関してはローラーブーツから煙が出てきている

状態でひどい有様になっている。

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい・・・　だましましたです」

もうそろそろ実戦用の新デバイスに乗り換えの時期なのかもしれない。

と言いかもついいですか？　もう帰りたいです・・・

~~~~~

もう帰ろうと思ったがロイド部隊長のプライベートチャットの文字が頭に何度も浮かんだので結局はまだ一緒にいる。

いったん寮でシャワー浴びてからロビーに集合のようだ。

寮へ向かっていると黒のスポーツカーが向かってくるのが見え、目を凝らしてみるとハラOWN執務官と八神部隊長だった。

ここに来て悪女3人集合でございますか・・・

ロイド部隊長、怨みますよ。

「なのはちゃん達に・・・クロスフォード君!？」

八神部隊長が大きな声をだし、隣ではハラOWN執務官がその声に驚いている。

そして僕と目が合ってしまったハラOWN執務官は目を逸らした。恐らく昨日の一件のせいだろう。

だから僕は言いたくはなかったんだ。

「はあゝ・・・」

僕は思わず大きなため息をついてしまい、それを聞いたハラOWN執務官はあたふたしだした。

もういいですよ・・・僕の心は昔からズタズタのぼろぼろですから。

「ち、違っんだよ! クロスフォードさん!!」

「・・・いいですよ。 もう・・・」

「ほらほらユーリ君?」

ムニユ

突然高町一等空尉が僕の腕に絡んできた。

今度は僕が驚く番だった。

なんせ昨日の件でもう僕のことを避けると思っていたのだがここまですぐ接近してくると思っていなかったからだ。

「フェイトちゃんも悪気があったわけじゃないから。ねっ？　そうでしょフェイトちゃん」

「う、うん。　ちょっと昨日のことで悩んじゃって」

「あ、あの～。　なのはさんとクロスフォード一等空尉ってどんな関係なんですか？」

「ば、馬鹿スバル！！そんなこと聞くんじゃないわよ！」

ナカジマ二等陸士が怒られながらもそう質問してきた。  
そんなのもちろん他人・・・

「友達だよ？」

「はい？」

「うん・・・ そうだよ・・・ そうだよねクロスフォードさん？」

「うちも友達やんね？」

い、一体何を言っているんだこの人たちは・・・

僕は吸血鬼なんですよ？

・ 八神部隊長にはロイド部隊長から通信が行ったと聞きましたか？・・・

「ユーリ君、私はたとえユーリ君が吸血鬼だとしても気にしないから。大丈夫だよ？ ねっ？」

高町一等空尉が、そつと僕の耳の傍でそう呟いた。

Episode 4 : About . . . Me . . . (後書き)

Mitsu「うわ、なのはさん狙ってるよ．．．狙ってるよ！  
」

ユリ「僕．．．食べる側じゃなくて食べられる側になってしま  
うよオルフィス

」

オルフィス「I think you are talking  
about something different betw  
een you and another (たぶん作者と兄弟は  
別のことを言っているような気がする)」

ユリ「僕の血なんておいしくないよ．．．」

Mitsu「いや、狙うってその意味じゃないくて恋愛対象なんだ  
けどな．．．」

オルフィス「Whatever, Next! Episode  
5: Here it comes! First Alert  
(もう、どうでもいいよ。次回! Episode 5: He  
re it comes! First Alert)」

誤字、感想お待ちしております！

## Episode 5 : Here it comes ! First Aler

ハラOWN執務官と八神部隊長は少し用があると言ってその場をあとにし、フォアード陣はシャワーを浴びに寮に戻ったので僕は一足先にシャリオ・フィニーノ一等陸士の元へと向かった。

理由としては、先に新デバイスのデータが見たいからだ。

「失礼します」

部屋の中に入るとフィニーノ一等陸士が新デバイスの最終チェックに入っていて、その隣では高町一等空尉がフィニーノ一等陸士の手伝いをしているようだ。

「あつ！ クロスフォード一等空尉！！」

僕が入ってきたことに気がついたフィニーノ一等陸士が駆け寄ってきた。

機動六課のメンバーはなぜこんなにフレンドリーなのか。僕なら絶対近づくことなんてありえない。

「どっしてここに？」

「・・・少しフォアード陣達の新デバイスのデータを見せてもらおうかと」

「そうなんですか？ いいですけど、専門な知識が必要になると思いますけど・・・」

その点なら問題ない。

僕はデバイスの製作、および管理をすることができるデバイスマイスターの資格を持っているからだ。

なぜこんな資格を持っているのかはさておきデータを見せてもらう。

ふむふむなるほど・・・

まあ、こんなものかな

「・・・ありがとうございます」

「い、いえ・・・何かありましたか？」

「ただ個人的に気になったただけなので気にしないでください」  
「は、はあ・・・」

首をかしげるフィニーノ一等陸士。

そろそろ部屋に戻ろうかと思ったときに悪女、もとい高町一等空尉

が話しかけてきた。

なんだかこの人と話すのはとても勇気があるような気がする・・・

「ユーリ君。　そういえば聞きたいことがあるんだけど」

「・・・それは気のせいでは？」

「い、意地悪ー。　女の子に向かってそんなこと言っちゃだめだよ。そんなことより、ユーリ君の魔導師ランクってどれくらいあるのかな？」

そう質問された瞬間に思わず無言になってしまう。

僕の魔導師ランクは・・・リミッターなしの状態でSS・・・機動六課に入ったおかげでリミッター掛けられてシングルAになっ  
てしまいましたと言いつつになっただが、口に出そうになっただ瞬間に  
その言葉を飲み込んだ。

「・・・どうでしょうね。　僕の実力はまた今度ってことにしておいてください」

それだけ言つと部屋をでて自室へと向かう。

『What do you think about their Device? (デバイスのことはどう思う?)』

「まあ、出力リミッター掛けられてたけど、ぜんぜん問題ないレベルだったよ。むしろ予想以上の出来だったね。ただそれを使いこなせるかは本人達しただけど」

先ほど見たフォアード人たちに用意されたデバイスの感想を述べていると・・・

ウオオオオン、ウオオオオン・・・

廊下がものすごい大きな音と共に赤く点滅し始めた。

これは警戒態勢の合図。

「・・・はあ、今日は休めそうにないねオルフィス」

僕はことの内容を知るためにロングアーチに連絡をとるが、いきなり多数の人物がモニターに現れたのでワンボタンで通信を切りそうになる。

ロングアーチに通信をつなげると、高町一等空尉 + フォアード陣、車で移動しているハラウン執務官、八神部隊長、そしてグリフィス部隊長補佐がそれぞれ別の画面に表示された。ふっ・・・グリフィス部隊長補佐なんて僕見ると顔が青ざめ始め幽

霊でも見たような顔をする。

あれはあなたが吸血鬼なんて呼ぶからですよ。

よかった、クロスフォード君。もしかしたら繋がらん思ったわ

「・・・状況は？」

協会騎士団調査部で追ってたレリックらしきものが見つかったんやけど、問題は対象がリニアールで移動中なんよ

移動中って・・・

そんなまさか・・・

ハラオウン執務官と高町一等空尉が驚きを隠せないでいる。

僕はその声を聞きながら自分で・・・いや、オルフィスと共に状況のデータを集めていた。ガジェットのせいで車両のコントロールがとれないでいるか・・・

それにガジェットの数は最低30体で、もしかしたら大型、または飛行型の未確認が出てくる可能性もある・・・  
ちよっとこれは新人のフォアード陣には難しいかもしれない。

いきなりハードな初出勤や。      なのはちゃん、  
クロスフォード君いけるか？      フェイトちゃん、

私はいつでも

私も

「・・・任務ですからね。      出ると言われれば出ますよ」

ハラOWN執務官、高町一等空尉、そして僕の順番に準備が出来て  
いることを伝える。

ただ違う点は僕以外はやる気満々なことだけだ。僕は正直な話、こ  
の任務では必要ないような気がするけど取りあえず念のために・・・  
ねっ？

スバル、ティアナ、エリオ、キャロもオーケーか？

はいっ！！

フォード陣の四人も元気のいい返事をした。  
初々しいね、僕みたいなニートもどきとは大違いだ。

よっしゃ！ それじゃあ機動六課フォアード陣出撃や！

「了解。 高町一等空尉僕は先にヘリポートに向かっておきます」

うん、私達もすぐに向かうね。 フェイトちゃんは現地で

了解

僕は通信を切り、八神部隊長に指定されたヘリポートへと向かった。機動六課での初任務・・・ほとんど隊長陣達がやってくれるだろうけど、さすがに仕事をしないわけにはいかない。

後でロイド部隊長や三提督の耳に入るのもいやだし。

それにもし未確認が出現したらと考えると・・・

「オルフィス、ウキウキしてるでしょ？」

『Do you think this is bored? N

ah (これがつまらないと思うか？ いや、楽しいだろ)』

「言っと思ったよ。 サポートは任せるよ」

『Of course bro（もちろんだ、兄弟）』

~~~~~

僕がヘリポートに着くとすでにヘリがスタンバイに入っていた。
ヘリに乗り込むと操縦士が話しかけてた。

「ういっす！ 自分ヴァイス・グランセニックって言います」

「・・・ ヴァイス・・・ 陸曹ですよね？」

「はいっ！ 俺のことを知っていて感激ですクロスフォード一等空尉！そう言えば、髪切られたみたいですけど、イメチェンってやつですか？」

髪の毛のことを聞きながら僕の手を掴んで上下に振る。
髪の毛のことに言ってきたのは彼が初めてだ。だけど、

「これは悪女に無理やり切られただけです。無理矢理ね・・・」

僕は無表情でそう言った。

しかしやっぱりこの機動六課のメンバーはおかしい・・・なぜ初対面の人間にここまで普通に話しかけられるのかわからない。

簡単な自己紹介（もとい向こうが一方的にしてくれただけだ）が終わると高町一等空尉達とフォアード陣がやってきた。
全員へりに乗り込み目的地へと急いで向かう。

へりの中では妙な空気だった・・・

フォアード陣にとっては緊迫感・・・僕にとっては早く終わらせて寝たいと言う気持ちがあったが少しだけこのフォアード陣達は大丈夫だろうかという心配があった。

高町一等空尉は緊張して暗い顔をしている自分の生徒達に声を掛け、緊張感を少しでも和らげようとする。

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りでいいからね？」

「はいっ！」

「頑張ります！」

「エリオとキャロ、それにフリードも頑張るですよ！」

「はい!!」

「キュル〜！」

ちびっ子達に声を掛けたのは八神部隊長のユニゾンデバイス。

たしかリインフォース？（ツヴァイ）だったかな？たしか階級は曹長。

よくモニターでウロチョロ、ハエのように飛び回っているのは見かけるが実際に見るのは初めてだ。

「危なくなったときはちゃんフォローするから。ねっ？ ユーリ君」

なぜ僕に振るんですかそこで・・・

「・・・ まあ、そうですね。僕にもフォローできる実力があれば・・・ですけど」

なんて言ってみるが、恐らくフォローどころか本音を言っちゃうと

こんな任務僕一人で十分だ。
それに限定解除するとS＋クラスが二人もいるこの部隊に僕が加わる時点で死角はない。

するとフィニーノ一等陸士から新たなガジェット反応が現れたことを報告され、余計にフォード陣達の緊迫感が増す。

な、なのはさん！クロスフォード一等空尉！ 空にガジェット反応です！

「・・・面倒ですね」

「わかったよ、シャーリー。 ヴァイス君私も出るよ、ユーリ君とフェイトちゃんと三人で空を抑える」

「了解です、なのはさん。」

ヘリのメインハッチがゆっくりと開かれものすごい勢いの風がヘリの中に入ってきた。

ハッチが全開になり、いつでも外に出られるようになる。

高町一等空尉が空に上がる準備を始める。

「それじゃあちよつと出てくるけど、みんなも頑張つてずばつとやつつけちゃおう!」

ずばつとつて・・・ 高町一等空尉、あなたやる気満々ですね。それにしてもフォアード陣少し緊張しすぎかな?

僕は高町一等空尉の隣に並ぶ前にフォアード陣の前に立った。

自分でも何をやっているのかわからないけど、何か一言伝えたほうがいいのかと思つてしまった。

「・・・頑張つて・・・ ください。 さっきはああ言いましたけど、危なくなつたらフォローはしますので」

「は、はい」

モンディアル三等陸士が僕が言つた言葉に驚いた顔をする。

「ユーリ君もうちよつと言葉かけてあげればいいのに」

高町一等空尉の隣に並んだらそんなことを言つてきたがそれを無視する。

だって、あれ以上何を言えればいいというのだ。

「どうでもいいですからさっさと終わらせましょう。　またへんなこと言つと髪のこと怒りますよ?」

「あ、あははは。　そ、それじゃあ行くね?」

高町一等空尉がへりから飛び降り、少しタイミングをずらしてから僕も飛び降りる。

目の前でピンクの光に包まれて、バリアジャケットを身に纏う高町一等空尉。

「・・・オルフィス」

『O k a y , B a r r i e r j a c k e t s e t u p)
オツケー、バリアジャケットセットアップ』

オルフィスの声と共に僕の体は真紅の魔力に包まれ漆黒のバリアジャケットを纏った。

そして右手には黒と赤で塗装された大鎌が握られている。

「スターズ1、高町なのは、行きます!!」

「ユーリ・クロスフォード、行きます」

僕と高町一等空尉がガジェット反応がある空域に向かっていると、ハラオウン執務官が合流した。

「同じ空は久しぶりだね。フェイトちゃん」

「うん、なのは」

「・・・来ましたよ」

本当は割り込むつもりはなかったが、敵がやってきたのでそういうわけにはいかない。
数はざっと見るだけで1000はいるな。

全ての空戦用のガジェットから一斉射撃が僕らを襲う。
散開して一斉射撃を回避し、近接戦闘が得意な僕は一気にその大部隊のガジェットの中心へと入ってオルフィスを大きく構える。

「オルフィス」

『Load Cartridge, Scythe Impact
(ロードカードリッジ、サイズ・インパクト)』

オルフィスの声とともに大鎌の先端からカードリッジが一発ロードされる。

構えた大鎌を一心に振り切り、僕を中心にして360°の広範囲に一閃が入る。

振り切った大鎌を構え直し、そこから離れると同時にガジェット達が爆発した。

しかしそれでも三分の一ほどしか倒せなく、残りのガジェットは各方向に分散した。

分散したガジェットを真紅の線を描きながら一体ずつ赤子の手を捻るかのように倒していく。

「す、凄いユーリ君」

「あんな量のガジェットを一瞬で」

「二人ともそこではさっとしてるとやられますよ?」

僕がそう言うと二人も分散したガジェットの迎撃に向かい、数を落としていく。

「流石ですね」

二体のガジェットを真っ二つに切り裂き、爆破した時に発生する爆

風を利用して次の獲物に手をかける瞬間に彼女達の実力を見極めていた。

やはり管理局のエースと呼ばれるだけはあつて動きが普通の魔導師と圧倒的に違う。

本気出して、勝率が五分五分くらいかな？

本当にそう思えるほど二人とも良い動きをしている。

《なのはさん！！ 別動隊が、リニアレールの方に！！》

「それは厳しいね。フェイトちゃん、ユーリ君、ここを「いえ、僕が行きます」えっ？」

「・・・僕が行きます。 オルフィス」

『Shadow Move (シャドウ・ムーヴ)』

真紅の魔力の粒子だけを残し、姿を消した。
消したというより高速移動が正解だけだね。

~~~~~

「ちよっ！！ ティア！」

「わかってるわよ！ あああ、もう！！」

リニアレール内にいるガジェットだけでも手こずっているフォアド陣四人だが、新たに別動隊が出現し向かっていると報告を受けたが、リニアレール内にいるガジェットの排除だけで精一杯だった。エリオとキャロの場合は急に出現した大型ガジェットに手を焼いている状態である。

その別動隊までもが到着してしまう状況なので余計に悪くなる一方だ。

「ぐっ…… このままだと……」

「エリオ君！！」

「えっ？ うわあああああ！！」

別のことを考えてしまい、気を抜いたエリオが大型ガジェットに吹

き飛ばされる。

その後、その大型ガジェットは腕のようなものを出し、エリオに全体重をかけようとするがエリオはストライダーでそれをなんとか抑えることに成功するが、

「うつ・・・」

流石に全体重をかけられているだけあってその重さは尋常じゃない、さらに到着してしまう別動隊のことも考えるとどうも気持ちが焦ってくるエリオ。

技を出して退かそうとするが、アンチマギングフィールドAMFによって魔力コントロールがうまく出来ない状況下に置かれた。

「エリオ君！別動隊が！！」

「も、もう着ちゃったのか。こ、これさえ何とかできれば・・・」

遠くの空を見してみると何十体ものガジェットドローン？型・・・要するに空戦専用のガジェットドローンの姿が見える。

もうだめか、と諦めかけたときだった。

「サポートに来ました。各自、自分の相手に専念してください」

不意に目の前に現れたのは、どこの誰でもない。  
ユーリ・クロスフォードだ。

~~~~~

何とか間に合ったみたいだね。
早く空を片付けよう。

僕は右手を前に出し、真紅のミッド式の魔方陣を展開させ、

「時間が掛かりすぎました、一瞬で終わらせます」

『Load Cartridge (ロードカートリッジ)』

「ブラッディ・スピア・エクセキューションバースト」

前に高町一等空尉達に向けた魔力で作り出した槍、ブラッディ・スピア・・・が1000本出現した。
そして僕の合図と共に、

「ファイア」

一斉に放たれガジェットドローン？型に全弾命中させる。

1000本あるので1体に大体10本以上の割合で、血の色のした
槍が突き刺さり、次々と爆発していく。

全部を破壊したことを確認した僕はモンディアル三等陸士とルシエ
三等陸士の方をみた。

あ、あれ？

気がつかない内にルシエ三等陸士の龍、フリードが大きなサイズに
なっていてモンディアル三等陸士が大型ガジェットドローンを撃沈
したところだった。

二人とも僕の方に手を振っているのが見える。

まあ、もちろん振り返すわけがないけども・・・

こ、これ僕は助けに来なくても良かったんじゃない？

なんと微妙な心境の中、機動六課での最初の任務は終了した。

Episode 6 : What is Caramel Milk?

機動六課の部隊正式稼動後にあつた初めての緊急出動・・・

密輸ルートで運び込まれたロストロギア、通称『レリック』をガジエットが発見し、リニアレールを襲撃するという事件。

だがそれを機動六課メンバーが阻止、そしてレリックを回収すると言ふ任務だったのだが、無事に解決することができ機動六課の後見人の人たちも満足しているという。

ちなみに回収した刻印ナンバー？のレリックは今、中央のラボにて保管されていて調査中と聞く。

「とおりやあああああ！！」

『Protection (プロテクション)』

ドガアアアアン

ナカジマ二等陸士が吹き飛ばされて木に背中からぶつかる。

誰に吹き飛ばされたかと言つと背が小さく、頭の両サイドにある三つ編みが印象的な少女・・・、いや女性だ。

スターズ2・・・

スターズ分隊の副隊長であるヴィーター等空尉が手取り足取り防御魔法について説明している。

そう、今僕はフォアード陣の練習に参加しているのだ。

まあ参加と言うより見学だけだね。

別の場所では、モンディアル三等陸士とルシエ三等陸士がハラオウン執務官に反応と回避の向上訓練、つまりは機動性アップのトレーニングをしている。

丸い球体が浮かんでいてそこから小さなビームのようなものが狙ってくる仕様だ。

同じ場所に長居はしないことを頭に入れて行動する。

最初はゆっくり確実に避けて行くことを最優先に移動するが、馴れていくごとに徐々にレベルを上げるためにスピードを上げていくというわけだ。

モンディアル三等陸士とルシエ三等陸士は二人ともデモンストレーションしてくれている先生、もといハラオウン執務官をじっと見つめていた。

さらに別の場所に行ってみよう。

ドンッ、ドンッ、ガンッ、ドンッ

銃声、そして爆発音がどんどん大きくなっていく。

高町一等空尉とランスター二等陸士は射撃訓練の真っ最中だった。

空中には高町一等空尉によって生成されたカラフルな魔力の球体がいくつも浮いていて、何個か高速に移動している。

精密射撃型は動いたり避けていたりすると、次の動作に遅れてしまうので一定の場所に留まり、さらに視野を広げて正確にターゲットを狙うことを有する。

「！！バレット、レフトV、ライトRF！！」

『Alert（注意）』

自分に飛んでくる球体に気づかず、思わずその場から動いて回避するランスター二等陸士。

地面の上を横向きに転がりながら回避すると立ち上がり、もう一度集中する。

「ほら、そうやって動いちゃうと後が続かない」

言われたことを実行できずに高町一等空尉から注意を受ける。

まあ、誰だって最初からうまくいかないだろう。

逆にうまくいってしまって、それをキープし続ければ教導官なんて役職なんて必要ないのだから。

「・・・はあくゝ。眠い」

やる事がなく、思わず大きなあくびをしてしまう。
んっ？ この気配は・・・

訓練場の外から二人の気配を感じ取ったのでジャンプしてその気配の近くまで移動する。
その気配の近くにある建物の屋上に着地した俺はその気配が誰か確認した。

あれは・・・

いくつかのモニターを開き映像を見ている人物を確認、一人は男の人でもう一人は女の人だ。
もう一度ジャンプして音を立てずにさらにその人たちの近くに着地する。

音を立ててないつもりだったのだが、その一人の女の人に気づかれてしまった。

「後ろから狙うなど、男のすることではないな」

ば、ばれてる

「・・・シグナム副隊長、後ヴァイス陸曹でしたか」

「ういっす!」

後ろにポニーテールをしているピンク色の女の人。

この人がライトニング分隊副隊長シグナム二等空尉だ。
うわさではかなりの戦闘好きで強い相手を見つけると勝負を挑むと
言う……

……やっぱりだめだ。 ロイド部隊長からの新しい命令を実行で
きない。

前の部隊にいたときの部隊長、ロイド・アンドリューから更なる任
務が与えられたのだ。
それも機動六課での初任務が終わってからすぐのことだった。

次のロイド部隊長からの任務…… いや、恐怖のミッションの内
容は、

『初任務ご苦労！ さて、ちゃんと最低一回は話せたみたいだな。
というわけで次は誰とでも普通に話せ！ 緊張したから無理でし
たっ、妊娠中の妊婦が倒れていてその人の夫が来るまで看病してま
したっ、とか言い訳をぬかしやがったら…… どうなるか楽しみ
だな、ユーリ（ハハッ）』

……あのね、人間といっしょにただで鳥肌が立ってしまいそ
うになる僕にそんな無茶苦茶なことを言わないでくださいよ。
それにロイド部隊長なんなんですかその最後の顔文字は…… あ
る意味怖いですよ。

「しかしクロスフォード、お前の先ほどの任務での強さはなんだ？
それにその髪型はどうした」

前者の質問はまだしも、二つ目の質問はスルーだめですか？
ちなみに後者の回答はどこかの誰かさんに二人係りで無理やり切られたんですよ。

「・・・知りません。 自分はこれで失礼します」

やはり無理だと悟った僕はその場から逃げると言う選択肢を選んだ。
ちなみにあつた選択肢は、

1、逃げる

2、走って逃げる

3、シャドウ・ムーヴで目に見えないほどのスピードで逃げる

の三択だ。

ちなみにどれも同じじゃないかなんてのは一切関係ない。
人間嫌いなんだから・・・

「待て、私の質問に答えろ」

首を鷲づかみされた僕は止まるしかなかった。
強制的に顔の向きを変更させられいやいやながらシグナム副隊長の顔を見る羽目になる。

「……いやです」

「……もう一度言ってみろ」

「僕は……いやだと言ったんですよ」

「……わかった。言いたくないのであれば無理強いはいしない」

殴られるのかと思ったが何もなかったので少し安心した。
しかし流石は戦闘^{バトル}マニア、好戦的だ。

シグナム副隊長は掴んでいた手を離すと、鼻を鳴らして寮のほうへと歩いていった。

ヴァイス陸曹も僕に一礼すると走ってどこかへ行ってしまった。

「はあ、この機動六課はどうかしてるよオルフィス」

『I don't think so (そうは思わないけどな)』

「何？ 楽しいとか言わないでよ？ ただでさえ人間が苦手なのに」

寮に戻り一服しようと思った時に悪魔のコールが入ってきてしまった。

普通の管理局員なら喜んでその通話に出るだろうが、僕にとってはそれは悪魔からの囁きが来たと思えない。

数秒考えたあげく取り合えず応答することにした。

あゝ、ちなみに僕にとっての悪魔は三人。

一人は笑顔と絡みつき攻撃で僕を翻弄する高町なのは、あだ名は『ミドルボインー等空尉』

二人目は、見た目は大人しそだが世話を焼くのが大好きなお節介・
・ 僕の中では悪魔の果実、通称『ブラック・サンダー・ビッグボイン執務官』だ。

そして最後に、機動六課部隊長の八神はやて・・ 悪女に認定された理由はまあ言わないでおこう。彼女のコードネームは『TANUKI BOIN 部隊長』。

まあそのニックネームみたいなものは作者が勝手につけたただけだから気にしないでください。

僕がそんなこと言はずないですから。

《あつ、ユーリ君さつき練習見に来てたみたいだけど、まだ近くにいる？　もしかしてもう戻っちゃったかな？》

対悪魔選択肢発動

パターン、ミドルボイン

1・・・いますけど

2・・・今察の前なのですが

3・・・ボイン一等空尉に使う時間なんて一秒たりともないです

「いるんだつたら、ちよつとティアナ達に隊長陣の実力を見せようかと思ってるんだけど・・・　もし来てくれたら今度お手製のキャラメルミルク作ってあげるから」

・・・キャラメルミルク、非常に興味があります。

実はお菓子や甘い飲み物が大好きなのだ。

伝説の三提督の一角であるミゼットさんに保護されたときにお菓子を貰ったとき以来お菓子やジュースなどの飲料にはまってしまっている。

高町一等空尉にそう言われた瞬間、さつきの対悪魔選択肢に変更が入った。

1・・・わかりました

2・べ、別に高町一等空尉のために行くんじゃないですから!!
天に誓って違いますから!!

3・はは・・・ はははっ・・・ た、高町一等空尉と2人つきり
なんですよね？他に誰かいたらその人殺してしまいますよ？

いやいや、1以外の選択肢は一体何なんですか？

「・・・わかりました、今から向かいます」

《うん！ ユーリ君は最後に回しておくからゆっくり来てもいいから》

まあ、大分近くにいるんですけどね。

訓練場を見ると、爆発音と共に黒い煙が空へと上がる。

どうやら高町一等空尉がハラウン執務官が始めたみたいだ。

まあ、気にせず ゆっくり行こう。

ユーリはいつも通りマイペースで向かった。

たどり着くと丁度ハラOWN執務官がガジェットを倒した所で、中型のスクリーンには数字が浮かんでいる。

F A T E 0 2 , 0 3 , 5 6

さらにその上の方には別の数字がある。

N A N O H A 0 2 , 0 3 , 5 3

どうやらこれはタイムアタックの数字のようだ。
高町一等空尉は2分3秒53、ハラOWN執務官は2分3秒56と驚異的なタイムを叩き出している。
恐らく普通の魔導師の平均が10分前後だろう。

「フェイトさんも記録更新です！　すごいすごい」

観覧席で指をひたすら動かしながらハラOWN執務官が叩き出したタイムに興奮しているフィニーノ一等陸士。

フェイトさん「も」と言うことは高町一等空尉も自己ベストを出し

たみたいだ。

「さ、さすがなのはさんとフェイトさん・・・」

観戦していたランスター二等陸士が思わず感嘆を漏らす。

もちろん他のフォード達も驚いてはいるが口がぽっかりと開いているだけで、言葉を発しなかった。

「うーん、もう少しタイム縮めたかも知れないね」

「私も狙いが少し甘かった気がする。次はもっと頑張ろうねレイジングハート」

『Ok , my master』

「バルディッシュも」

『Yes sir』

「あつ、クロスフォードさん!!」

ナカジマ二等陸士が僕の事に気づき大きく手を振ってくる。
まあ、もちろん手を振り返すわけがないけれども何故かロイド部隊
長に言われたことが頭を何度もよぎる。

「あつ、ユーリ君ちゃんと来てくれたんだ。　　どうかな、私達に近い
タイム出せそう?」

「クロスフォードさんの実力はこの前の任務で見せてもらったから
大丈夫だと思うけど、頑張って」

不意に近寄ってきて頭を撫でようとしてくるハラウン執務官をハ
ラリと避けて、準備を始める。
ハラウン執務官は僕に伸ばした手をがっくりと落とし、半泣きに
なりそうになっていて、フォード陣達はそれを苦笑しながら見て
いた

「準備出来ました。　　さっさと始めましょう」

観覧席から離れて、定位置に立ち準備ができたことを伝えるが、

「えっ?　　クロスフォード一等空尉セットアップの方は・・・」

フィニーノ二等陸士が戸惑いながらそう質問してきた。

僕の格好は機動六課に入ってから毎日のように着ている男性用の制服でバリアジャケットではない。

「こんなことにオルフィスの力なんて必要ありません。これだけで十分です」

左手を前に出すと同時に真紅の魔方陣を展開させ、血の色のした槍・
・ブラッディ・スピアを1本生成する。
それをバトンを扱うかのようにクルクルと回し、構える。

「どうぞ」

「え、え」と・・・」

「ユーリ君がああ言ってる事なんだし・・・ スタートしちゃおう」

「わ、わかりました。それじゃあ・・・」

手馴れた手つきでボタンを押していく。

6つくらい表示されているモニターには文字がズラーと並んでいて、書いてある文字を読む前に下へ下へとスクロールされてる。

「ガジェットの設定はなのはさん達と同じで・・・っと、これでオッケー」

目の前に20体のガジェットドローン？型が出現した。

なるほどね、これを倒せばいいだけか。

「ユーリ君、ルールはいたって簡単。そのガジェットドローンを全部破壊した時のタイムを競うだけ。もちろんAMFもついているから、そこだけ気をつけてね」

「『クロスフォード一等空尉頑張ってください！』」

フォアード陣達からエールが飛んでくる。

聞こえない。僕には何もエールは聞こえないよ。聞こえるのは風の音と鳥の鳴き声だけ。

「それじゃあ・・・」

フィニーノ一等陸士が1つのボタンを押すと目の前に小型スクリーンが表示され、数字の『3』という文字が映っている。

「オルフィス、今日は珍しくもうお腹減ったから早く終わらせるね」

『That's surprising（それは驚きだ）』

オルフィスにそう言ったときにはすでにカウントが『1』になっていた。

そしてついに、

『Start』

スタートと表示されると同時にその文字の下に自分のタイムがカウントダウンされ始める。

さらに10体のガジェットが突っ込んできて、残りは逆方向へと移動した。

逆方向へ行った組は時間を少しでもとらせる逃走組みだろう。

「そんなの関係・・・ ないですけどね!!」

今の僕はリミッターをつけられて必殺技まで限定されてるけど、これくらいすぐに終わらせる。

片手だけだったブラッディ・スピアをもう1本生成し、迫ってくる

ガジェットに応戦する。

まず2体を串刺しにして破壊、さらに近づいてきた1体を踏み台にすると同時にそれも爆破させた。

空に上がると7体が一斉に襲ってき、四方八方から接近されたので離脱が不可能に。

「逃げないよ？　むしろちゃんとしてきてくれたので手間が省けた」

シャドウ・ムーヴで一瞬にして7体を破壊。
残るは逃走組みの10体だけだが・・・

「あれ、完璧に狙ってって言うてるよねオルフィス」

『H a h a , I a g r e e （はははっ、同意だ）』

10体とも固まって逃げているので思わず笑ってしまう。

『W h y d o n ' t y o u j u s t s e t u p a n d t a k e t h e m a l l d o w n f a s t ? （セットアップして速攻倒せばいいじゃないか）』

たしかにそっちの方が楽か。

「オルフィス、セットアップ」

今回も大鎌のみでバリアジャケットは身に付けていない。

「それじゃあ・・・」

ドガドガドガアアアアン

~~~~~

観覧席に戻してみると先ほど似た光景が目に入った。  
フォアード陣達はみんな目を点にし、口を先ほどよりも大きく開いている。

変わったのは隊長陣達まで同じような顔をしているからだ。  
驚いているのはきつと僕の出したタイムだろう。

Y U R I    0 0 , 2 8 , 4 2

28秒42か・・・

まあ、最初っからセットアップしなかったこともあるけどまずまず

かな？

限定解除してもらえれば5秒掛からないと思うけど、リミッターつけられてると流石にいつもの調子がでないから困る。

「く、クロスフォード一等空尉・・・それでリミッターについているんですよね？」

フィニーノ一等陸士が僕のタイムが載っているモニターを眺めながら聞いてきた。

いやだってこの部隊、魔導師ランクSオーバーが多すぎるから、リミッターつけないとだめだったでしょ？

「そうですよ？ SSからAランクまで落としてます」

一同「くくくえええええくくく！！」「くくく」

うるさっ！！

突然の大きな声に思わず耳を両手で塞いでしまった。

同時に人間恐怖症（ユーリ命名）が発症して鳥肌が立ち始めた。

僕は急にそんな大声上げられると、昔僕を殺すために追いかけてきた人達を思い出すからやめて欲しいんだけど・・・

そのせいで鳥肌が立つし、体は震えだすし・・・ いいことなんて1つもないのだから

「ユ、ユーリ君、SSだったの!？」

「はっ!？ い、言ってしまった・・・ これだけは話さないつもりでいたのですが・・・」

「わ、私今日からユーリさんって呼んでいいですか!！」

「ば、バカスバル!! あんただけ馴れなれしくさせるわけないでしょ! ユーリさん、私に今度いろいろと・・・」

「機動六課にオーバーSがこんなにたくさん・・・ すごいねエリオ君」

「う、うん。 ユーリさん、か・・・」

は、お腹減った。

僕はもう食堂に行きます・・・

シャドウ・ムーヴを使ってドンチャン騒ぎを始めた場所から離れた。

あっ……この時間帯たくさんいるじゃん……もういやだ……

Episode 6: What is Caramel Milk? (後書き)

Mitsu「ナニコレ？ 今回変なネタばかり詰め込んだ感が・・・」

なのは「ミドルボイン／／・・・」

フェイト「ブラック・サンダー・ビックボイン／／」

はやて「TANUKI BOIN・・・ 作者後で覚えときや」

Mitsu「あは、あははははは」

**E p i s o d e   7 :        T h i s   i s   s u c k s (前書き)**

今回はヴィータのあの名言が登場。

あのときのヴィータ殿には恐怖を抱いてしまった作者でございます

それでは    本編    どうぞー！

## Episode 7 : This is sucks

「はあ、なんで僕がこんなところに・・・」

「クロスフォード一等空尉もう諦めた方が良いと思いますぜ」

ヴァイス陸曹がそう言うが僕はどうしても納得がいかない。  
ちなみに僕は今ヘリの中に、悪女三人、そしてフォード陣と共  
にいる。

なぜ、納得いかなかった？

それは数分前のこといつもどおり自室にいた時だった。  
決して引き籠もっていたわけではないよ？  
まあ、そんなことはどうでも良いとして突然高町一等空尉とその仲  
良し悪女達が部屋に押しかけてきた。

「ユーリ君任務だよ!!」

「ほら、クロスフォードさん任務だよ?」

「任務やで〜」

ハイテンションの中入ってきた人間で言うところの美少女と言えるであろうが僕にとっては悪女でしかない三人が突撃部隊のように扉を開けて入ってきたのだった。

そう・・・ いうなればとても大切な日に嵐がやってきたような感じだ。

僕はいそいでベッドの中に入って寝ている振りをしてやり過ごそうとしたが向こうの方がスピードが早く、机の上でモニターに向かっている状態のまま発見されてしまいどうしようもなくなる。

そして単独で行動できるはずの僕が強制的にへりに連行されてしまつて今に至るという・・・

「・・・恨みますよ・・・」

「何か言つたかな、ユーリ君？」

「うつ・・・ なんでもありません」

地獄耳の高町一等空尉が笑顔で振り向いてくれたので、なぜか目を逸らしてしまう。

人間というものは本当に厄介です。

「ほなら任務の説明をするな」

八神部隊長のその言葉と共に賑わっていた空気が一瞬にして変わる。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されとる次元犯罪者」

モニターが開き一人の人物画像が映し出される。

濃い紫色の少し長めの髪に、悪者を印象付けさせる目つき・・・

「ジェイル・スカリエッティ・・・」

ハラオウン執務官が難しい顔をし、重たい空気が流れる。

そう、このモニターに映し出されている人物・・・

ジェイル・スカリエッティは先にも説明があつたように広域指名手配されている次元犯罪者。

これまでも彼の研究所らしきところがいくつも発見されているらしいが、彼へと繋がる証拠はほとんどと言っていいほど発見されていないらしい。

「で、これから向かう先はここ。 ホテル・アグスタ」

身の丈が本当に小さく、髪が薄い水色の人形のような人物が空中を飛びモニターの隣へと並ぶ。

八神部隊長のユニゾンデバイスであるリイン曹長だ。

しかしいつ見ても小さいな・・・

声に出しては言えないけど。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護それが今日のお仕事ね」

高町一等空尉がフォアード陣、そして僕の方に向いてそう説明した。

しかし警備と警護だけならなぜ僕が必要なのか・・・

せっかくサボリ、じゃなくいろいろな調べ物ができたのに。

しかしフォアード陣はみんなしっかりと話を聞いているな。

フォアード陣のほうを見ると、全員真剣な眼差しを隊長達に向けて話を聞いている。

ナカジマ二等陸士の場合は時たま狼のような動物を撫でているけどね。

この青と白の狼はザフィーラ。

確かオルフィスの情報だとこれが狼形態で人間形態もあるらしいが・

・・・まあどうでもいい。

「私達とユーリ君は建物の警備に行くから・・・」

「・・・ちょっと待ってください。そんなこと聞いてないのですか？」

何も言われず強制的に連行された僕は今の言葉を聞き捨て出来なかった。

てつきり仕事をしないでもいいのかと思っていたのだがなぜいきなり警護をしなければならないのか・・・

それも人間達がするオークションならばさらにどうでもいい。

「まあ、部隊長命令やクロスフォード君」

「そつだよ？ 一応クロスフォードさんも機動六課の一員なんだから。後から頭撫でてあげるから、ねっ？」

「・・・頭撫でるのはどうでもいいとして、無理やり連れてきた理由はなんですか？」

頭を撫でるのはどうでもいいといった傍からハラウン執務官がモンディアル三等陸士、そしてルシエ三等陸士のところで逆に頭を撫でてもらう始末になっていて、それを他の面子で苦笑いで見ている

状態だ。

頭撫でるって・・・ だから僕は子供じゃない言うのに・・・  
この背がいけないのか？ この背がいけないのですか？？

「無理やり連れてきた理由はちゃんとあるのよ、クロスフォード君」

僕の隣、まあ正確には一人分空けて座っているシャルマル先生が口を開いた。

もしかしてその足元においてあるケースに関係が・・・

「あつ、シャルマル先生気になっていたんですけどその箱って・・・」

ハラオウン執務官の頭を撫でながら、空いている片手でシャルマル先生の足元においてあるケースを指差す。

「んっ？ ああ、これ？ 隊長達とさっき言ったクロスフォード君のお仕事着。ふ ふふ」

彼女の不敵な笑みに思わず背筋に電撃が走った。

~~~~~

「あの・・・ 僕帰ってもいいですか？ いえ、帰らないので普通の格好でフォアード陣と表の警備を」

「だめだよユーリ君」

「そんなにいやがらんくても似合っとなんで？」

「うん。 思わず抱きしめなくなっちゃう」

「だめだよフェイトちゃん」

ハラオウン執務官が思わず即座に逃げてしまいたくなるセリフを吐いた。

あの謎のケースの中身は本当に服だった・・・ が！

中身が普通の服ではなかった。

僕のケースの中にはスーツ・・・ それもすごくお高そうな物でちゃんとネクタイまで入っていきおり、ついでに手紙まで入っていたの

だった。

そしてその手紙は誰からかというところもみんなもご存知ロイド部隊長からだ。

内容はみなさんもお察しのことだろう。

あの人いつか一発いれないとな・・・

「・・・それにあのさっきの受付の人・・・気に入れません。人を背の高さで判別するなんて」

このホテルに入場する際に身分証明書を掲示しなければいけないのだが、僕は身分証明書（ミゼット提督に作ってもらった80%嘘、10%たぶん、10%本当？のまあ言ってしまうとほとんどでっち上げた物）を見せたにも関わらず引っ掛かってしまったのだ。

受付の人はこういった

「お子様はご入場できません」

先に入場して僕を見ていた悪女三人は口を押さえながら笑っていた。背が小さいのが何ですか？すこし小さいだけじゃないですか・・・

高町一等空尉にも八神部隊長にも負けていますが・・・

でも、悪女三人のおかげで通してもらったことはできたが、どこかイライラするよ？

「ユーリ君・・・ 私達はどう、かな？」

高町一等空尉が頬を薄いピンク色に染めながらそう質問してきた。恐らく彼女達が着ているドレスが似合っているのかどうか聞いてきているのだろう。

「ど、どや？ このドレス」

「く、クロスフォードさんの感想・・・聞きたいな？」

他の二人の悪女も同じ内容の質問をしてきた。

正直綺麗とか、似合っているとかの基準自体がわからない・・・

ここはさっきロイド部隊長が手紙に書いていたことを言つとくか

「・・・と、とてもいいと思いますよ？ まるで暗い闇を照らすような一輪の美しい花のように・・・」

「『『えっ？／＼／』』」

三人とも手を頬に当てて後ろを向いてしまった。

僕、何か間違ったことを言ってしまったのかな？

そして三人とも顔を振りまたこちらを向きなおした。

「『『ユーリ君（クロスフォードさん）！！』』」

「は、はいっ！！」

急に大きな声を出してきた三人に驚き足が地面から数センチ浮いた。

「『『私と一緒にいて（一緒にいてください）（一緒におって）！！』』」

「いえ、遠慮しておきます」

僕はそう言つとそのままその場を離れた。

離れる際に後ろから残念そうな声が聞こえてきたが、気にしないで
おこつ。

その時、僕はまだホテルに接近してくる物体にまったく気がついていなかった・・・

~~~~~

しばらくするとロングアーチから緊急連絡が入った。

どうやらシャルマル先生のおかげで早い段階で何かの接近に気がついたようだ。

来た来た。 来ましたよ！ ガジェットドローン陸戦？型、機影

30、35！！

陸戦？型、2、4！！

まあ多いといえば多いし、少ないと言えば少ないほうか・・・  
副隊長達はどうしているのか

「ロングアーチ、シグナム副隊長とヴィータ副隊長は」

たった今迎撃に向かったところです！

たった今・・・か

ここにも暇なだけだから屋上で様子を見とくか。

幸い、屋上に近い所で警備していたのですぐについた。

下の階で警備していたとしても空を飛べば一瞬なのだけね。

屋上について茂みの方を見てみると爆発音と共に空へと黒い煙がいくつも出ていた。

そして下ではランスター二等陸士、そしてナカジマ二等陸士がモニターの映像を見ている。

「副隊長達とザフィーラすごい」

「これで・・・能力リミッター付き・・・」

ランスター二等陸士がなぜか悔しそうにしながら映像を見ているのを僕は見逃さなかった。

一体彼女は何で悩んでいるのだろうか・・・

「うん？」

『Bro... this is... (兄弟... これは...  
・)』

「妙な感じがするね」

召還魔法・・・ かな。

ただ言える事は本当に小さなものが幾つも現れ、数秒で気配が消えてしまったことだけ。  
さらには・・・

「ガジェットの数減るスピードが下がった？ ロングアーチ」

すぐさまロングアーチと連絡を取る。

向こうもどうやら召還魔法で異変が起こったことに関してわかっていたようだ。

そして副隊長、ザフィーラ、そして現場で指揮をとるシャマル先生も手こずっているらしい。

『Wanna go? (行くか?)』

「部長と隊長達には悪いけど、一応単独行動がメインだから・・・  
オルフィス、セットアップ」

『Barrier jacket setup , Blood  
Scythe Form (バリアジャケットセットアップ、ブラ  
ッドサイズフォーム)』

漆黒のバリアジャケットを纏い、片手に大鎌を手にし空へとでた。  
空へと出た瞬間に転送魔法で数体フォード陣の方へとガジェット  
がでた感じがした。

「・・・シャル先生聞こえますか？」

く、クロスフォード君？ どうして・・・ 中の警備は？

「僕は単独行動が可能です。 今シグナム副隊長とヴィータ副隊長  
の方へ向かっています。 さっき数体新人達の方へガジェットが転  
送されましたが、先に副隊長達のほうを片付けに行きます」

わ、わかったわ。 よろしくね

シャル先生と通信を切り、最速のスピードで副隊長達の元へと向  
かう。

おかげですぐに二人を見つけることができた。

「クロスフォードなんでお前がいるんだよっ!」

「テストロッサ達と一緒にではなかったのか」

「今はそんなことよりいち早くこいつらを……。オルフィス」

『Load Cartridge Scythe Impact)  
ロードカートリッジ、サイズ・インパクト』

カートリッジを使用し数体のガジェットへと間合いをつめる。  
さすが副隊長陣……。僕が来る前にここまで減らしてる……

大鎌を振るいその数体のガジェット一瞬にして撃破する。  
どうやらこの数体でここら辺は全部らしく、他に反応がない。

「それでは、僕は新人達の方に行きます」

「私はザファイラの所へ向かう。ヴィータ、クロスフォード後は頼んだぞ」

「おいっ! 待てよっ!!! クロスフォード!!!」

ヴィータ副隊長の制止を無視し、その場から離れた。  
しかし後ろから僕に超えず劣らずのスピードで追って来た。

「ちつ、ティアナのやつ無茶してやがる」

ヴィータ副隊長が舌打ちした。

この距離からでも見える。

ランスター二等陸士が4発のカートリッジを使い、彼女の周りにオレンジ色の魔力の球体を生成しタイミングを見計らっているところが。

・・・それは無茶というものですよ。

その生成した球体を一斉に放ち、さらには彼女のデバイスであるクロスマーシューで目標であるガジェットに向かって弾を連発する。  
その発射された弾が次々にガジェットに命中して爆発する・・・  
ただ、一つを除いて・・・

ガジェットに向かって放たれたはずの弾一つが、誘き寄せ役を担当していたナカジマ二等陸士の下へと飛んで行っているのだ。

あれは、直撃コース。

「あの馬鹿ッ!!」

「ヴィータ副隊長落ちてってください。　僕が行きます」

ナカジマ二等陸士は自分に飛んできた弾にようやく気づくが回避に間に合わない。

「あっ・・・」

直撃する瞬間・・・

『D r a i n   S p e l l   P o w e r   （ドレイン・スペルパワ  
ー）』

直撃コースのその弾に立ちばかり、大鎌でその弾を防ぐ・・・  
そして大鎌にぶつかった瞬間そのオレンジ色の弾は見る見るうちに  
吸収されていく。

「ゆ、ユーリさん」

ナカジマ二等陸士は驚いた顔をしていた。  
なんせホテル内で警護していると思っていた人物が目の前にいるの  
だから当たり前だろう。

後から追ってきていたヴィータ副隊長が到着し、ランスター二等陸士を睨んだ後に大声で怒鳴った。

「ティアナ！ この馬鹿ツ！！ 無茶やった上に味方を撃つてどうすんだっ！！」

その怒声にランスター二等陸士は大きく目を見開いている。きつと驚きと恐怖が彼女の中で駆け巡っているのだろう。

「ち、違ってますヴィータ副隊長。 い、今はその・・・ コンビネーションのうちで・・・」

「残念ながらさっきのは直撃コースですよ」

言い訳を言っているナカジマ二等陸士に僕はそういった。

さっきのはコンビネーションでもなんでもない・・・

味方を危険に犯すなんて、最悪のコンビネーションだ。

そんなの僕の中ではコンビネーションなんて言わないし、言わせない。

「ち、違ってます！ 今のはその・・・ 私がいけないんです！」

「うるせゝ馬鹿共！！ もういい、後はあたしとクロスフォードでやる・・・ お前らは・・・ すっこんでろっ！！」

それから数分後・・・

ホテルで行われるオークションも無事に開催され、ガジェットの殲滅も無事に終わった。

## Episode 8: Vampire and Demon (前書き)

いよいよ来てしまった。

なのはさん VS ユーリ・・・

悪魔 VS 吸血鬼・・・

一体どちらが強いのか・・・

## Episode 8 : Vampire and Demon

ホテル・アグスタが襲撃され、僕、副隊長達、そして新人のフォアード陣でガジェットを殲滅してから数分後調査班の人たちがやってきた。

僕らは現場検証に関しては管轄外なのだがとりあえず知らせたほうが良いことはすべて話さなければいけない。

ちなみに僕の場合は初対面の人と話すのがいやなのでデータだけを転送した。

人間のためにここまでやるなんて僕本当に成長したよ。自分を褒めよう。よく頑張った僕！

「オルフィス」

『What's up? (ん?)』

「僕はどうして管理局に入っただろうね？」

『I have no idea Bro (知るはずないだろ)』

「実は僕にもわからないんだ・・・」

さきほどガジェットと戦闘を行っていた森林で腰を下ろし空を見上げながらそんなことを呟く。

なぜ僕は管理局に入ったのか・・・

なぜ僕は人間を守るために自分の命を賭けなければいけない？

昔、僕を殺そうとしてきた人間を・・・守る？・・・

人間すべてが悪いやつじゃないぞ、ユーリ

ロイド部隊長が僕にそう言い続けてきた言葉が頭をよぎった。  
実際のところ・・・どうなんだろうか。

ガサツ、ガサツ

不意に人の気配と共に足音と声が聞こえてくる。  
一人はわかる、この気配はハラオウン執務官だ。  
だけど、もう一人は？・・・

そつと覗いてみると後ろ髪を結び、メガネをかけている青年がハラオウン執務官と肩を並べて歩いてくるところが見える。

彼はどこかで見たことある。

たしか無限書庫の司書長、ユーノ・スクライア。

高町一等空尉とハラオウン執務官の幼馴染ってオルフィスの情報に書いてあったような・・・

「ユーノ君！ フェイトちゃん！」

「「なのは！」」

何これ・・・

ここから見た感じ、スクライア司書長が世間で言う両手に花の状態  
なんだけども・・・

なんだか・・・ ここら辺がイライラする・・・

僕は右手で心臓の辺りを押さえた。

この気持ち何なんだろう。

今までに感じたことのない気持ち。

笑顔で話をしている高町一等空尉、そしてハラウン執務官を見る  
たびにむず痒くなると同時にどこからか苛立ちまでやってくる。

僕は夢中で木陰から飛び出し方を並べて立っている高町一等空尉と  
ハラウン執務官の後ろに隠れた。

もつと詳しく説明すると小さな子供が母親の後ろに隠れているよう  
な感じだ。

「「キヤッ！！」」

「な、なのは、その子は？」

「ゆ、ユーリ君？」

「く、く、く、クロスフォードさん?!」

「……い……」

「えっ？」

「……彼女達に触らないでください……」

~~~~~

機動六課の寮へと戻り、僕は自分のベッドの上で横になっている。ちなみに午後の訓練はさぼった……というより僕には関係ないことだからさぼりとは言わないのかもしれないけど。

そんなことよりも、今とても後悔している……

あの時、突然自分の意識が変わったような感じになって、気がついたら…… あんなことになってしまった。

スクライア司書長はもちろんのこと、悪女二人もかなり驚いていた。自室のベッドの上で自分の身長ほどの大きさのある抱き枕に顔を押し

し付けながらそう考えていた。

僕は人間が嫌い。

僕は人間が嫌い。

僕は人間が・・・

目を瞑り、心の中でそうやって何度も言い聞かせる。

だけど出てくるのは、機動六課のメンバー、ロイド部隊長、伝説の

三提督の方々・・・

みんな僕を見てやさしく微笑んでいる。

そして・・・その人たちの先には・・・

「ユーリ君」

「クロスフォードさん」

高町一等空尉、そしてハラウン執務官。

二人が笑顔を作りそつと手を差し伸べてきた。

「僕は・・・前に言ったとおり吸血鬼です。それなのに、なぜあなた方はこんな僕に」

やさしくしてくれるのですか？・・・

吸血鬼だからと毛嫌いされ殺されそうになり、それ以来人間から避けてきて、いつしか人間が嫌いになった、こんな・・・こんな僕に・・・

「ユーリ君」「クロスフォードさん」

二人はゆっくりと近づいてき、逆に僕は1歩、2歩恐がるように後ろへと下がる。

そして僕に抱きつくように手を延ばして来て・・・

「はっ！！　ぼ、僕は・・・」

時計を見てみると朝の4時。

どうやら僕はあのまま寝てしまっていたみたいだ。しかし、さっきの夢は・・・

さっき見ていた夢をボンヤリだが頭の中でもう一度再生する。最近知り合った人たちの笑顔・・・そして最後の二人・・・僕は人間が嫌いな・・・はずなのに・・・

『Nightmare, bro? you looks like kind of sick but not the bad one (悪い夢でも見たのか兄弟? 風邪を引いている時の顔をしてる。 だけど悪い風邪じゃなさそうだ)』

寝起きでかなり重くなっている体をゆっくりと持ち上げ、カーテンを開ける。

外はまだ薄暗く、太陽が完璧に昇っていない。

「悪い風邪じゃないってどういうこと?」

『Ok, Let me guess... You fall in love or something? (よし、当ててあげよう。 恋・・・に落ちた、とか?)』

「ちょっと今から僕じゃなくてフィニーノ一等陸士にメンテしてもらおうか」

『I think I was wrong bro, my mistake (なんでもない! 見間違いだ! うん!)』

「よろしい」

ドオン！ バン！ バン！

外から銃声やら爆発音やらその他もろもろの危険な音が聞こえてきた。

こんな朝早くから一体誰がしているんだろうか。

僕は目を瞑り意識を集中させ気配が誰なのか探ろうとする。

「この気配は・・・ ランスター二等陸士とナカジマ二等陸士？」

そう、感じ取った二つの気配の持ち主は先日無茶をしてヴィータ副隊長に怒られた二人だった。

それにしてもまだ訓練時間には早いのに一体何をしているのだろうか。

僕は少しだけ気になった・・・

少しだけだよ？ 彼女達が心配とかそんなことはぜんぜん思っていないよ？

昨日着替えないで寝てしまっていたので、制服を新しく着替えてから部屋を出た。

~~~~~

「スバルそうじゃなくて・・・ そうそう」

「ティアー、これ難しくない？」

「これくらい出来なきゃ強くなれないのよ！」

どうやらこんな朝早くから自主練習をしているようだ。

見た感じすでに訓練着は汚れていて、かなりきつい訓練をしていたみたい。

「それで彼女達は何をやっているんですか？」

「あつ、やっぱりばれてましたか？」

草むらからヒョイと顔を出したのはヴァイス陸曹だった。  
どうやら彼の場合僕より先に見に来ていたようだ。

「いったいどれくらい前から彼女たちはやっているんですか？」

「丁度さつきはじめたみたいっすね。もっとも今日は二人で練習してるみたいですけど」

「でも何で急に自主練習なんて・・・」

「昨日少し話したんっすけど、自分は凡人だから・・・ 詰め込んで練習しないといけない・・・ だそうですよ」

「・・・そうですか」

ランスター二等陸士・・・

あなたはそこまでして兄の魔法が役立たずではないことを証明したいのですか。

・ それにナカジマ二等陸士はここまでしてまで親友の彼女のことを・・・

僕の目にながむしゃらに同じ連携プレイをやり直す二人の姿が目についた。

高町一等空尉も自分が何を教えたいのか・・・  
何をこめて教えているのか・・・

彼女達がそれに気づくためには恐らく高町一等空尉本人が説明する必要があるだろう。

どちらが後悔するのか・・・

いや、それともどちらも後悔してしまうのか・・・

数日後にある模擬戦は見に行ったほうがいいみたい。

僕は彼女達に背を向け寮の方へと足を進めた。

「何も言わないでいいんっすか？」

「・・・今の彼女達に何を言っても聞かないでしょう。　ヴァイス  
陸曹・・・何か問題が起こったら連絡ください」

「は、はぁ・・・」

それだけ言い残し、部屋へ戻っていった。

~~~~~

数日後・・・

今日は模擬戦の日・・・

要するにスターズ 対 高町一等空尉の模擬戦がある日だ。

あれからスターズの二人は結局がむしゃらの自主練習を続けていた。

「しかしまさかお前が見に来るなんてな。 クロスフォード」

僕とライトニングの二人と一緒に観戦しているヴィータ副隊長が何か不満気にそう言ってきた。

ヴィータ副隊長のその言葉にライトニングの二人も顔を縦に振った。

「・・・ちょっと気になることがあるだけなんで気にしないでください」

ガチャ

急に大きな音を立て近くにある扉が開いた。

なぜかその人物が出てきた瞬間にあの夢のことを思い出し、体が一瞬跳ねたがなんとか気持ちを落ち着かせることができた。

そう、その人物とは悪女の一人・・・ハラOWN執務官だ。

「もう模擬戦始まっちゃってる？ あ、あれ？ クロスフォードさん？」

「・・・僕がここにすることがそんなにおかしいですか？」

「今スターズの番」

「ホントは私がスターズの模擬戦も引き受けようと思ってただけだね。最近なのは部屋に戻ってからモニターに向かいっぱなしなんだよ」

ヴィータ副隊長とハラOWN執務官がそう話しているうちにスターズのうちの一人が反撃に掛かっていた。

その人物は両手に銃を構え、いくつもの魔力の球体を作り高町一等空尉を狙っている。

ランスター二等陸士の攻撃が今始まろうとしていた。

「クロスシフト・・・ですか」

「あつ!?!」

ライトニングの二人、モンディアル三等陸士とルシエ三等陸士が僕が見ている方向を見た。

「クロスファイアアアア・・・ シュート!!」

ランスター二等陸士により生成されたいくつもの球体が一斉に空を舞い目標である高町一等空尉に放たれた。

だが僕の隣で彼女の攻撃に異変を感じている人がいた。

「なんかいつもより切れがねえな」

「でもコントロールは良いみたい」

ハラOWN執務官とヴィータ副隊長が切れがないことに対し疑問を持ってみたいだ。

たしかにあまり彼女の技を見たことがない僕でも切れがないと言えるほどだった。

高町一等空尉はその球体を簡単に回避したが、彼女の目の前に青色の道が出来上がった。

ナカジマ二等陸士のウイングロード、それが大きな弧を描きながら現れたのだ。

そしてその道をものすごいスピードで駆け進むナカジマ二等陸士がいた。

「うおおおおおおお!!」

高町一等空尉は砲撃を放つが、ナカジマ二等陸士はそれを無茶苦茶なやり方で防御しそのまま体当たりした。

「でやあああああ！！」

二人は衝突し、数秒硬直が続いたが高町一等空尉が彼女を弾き、別のところにあるウイングロードへと飛ばした。

「こらスバル。だめだよそんな危ない軌道」

弾かれさらに突き飛ばされたナカジマ二等陸士はなんとか無事着地した。

「すみません！でもちゃんと防ぎますから！！」

なんだかいつもと違う・・・
僕はそう感じざるおえなかった。

次に何が起こるのかと思ったらランスター二等陸士がビルの上からの遠距離魔法・・・
さらにそれを援護するかのようにまた高町一等空尉に突っ込んでいくナカジマ二等陸士・・・

また高町一等空尉とナカジマ二等陸士の二人は衝突し激しい攻防を続かせており、さらに遠距離からランスター二等陸士の遠距離攻撃が加わると思ったのだが、ビルの上にいた彼女が一瞬にして消えた。

「あっちのティアナさんは幻影!？」

「本物は!？」

ルシエ三等陸士とモンディアル三等陸士が焦りつつも本体を探し出す。

本体はというと、高町一等空尉の頭上に作られたウイングロードを突っ走っていた。

ランスター二等陸士は銃口に魔力刀のブレードを作り出し、力強くウイングロードを蹴り頭上から最後の一発を叩き込もうと飛び込んだ。

「てええええええええい!!」

だが・・・

「レイジングハート・・・モードリリース」

『All right（わかりました）』

高町一等空尉はデバイスを待機状態に戻した。

そしてそのまま自由落下していたランスター二等陸士が衝突した瞬間、大きな爆発音と共に爆風がこちらまでやってきた。

煙が晴れ、姿を現したのはランスター二等陸士が出したブレードを血を流しながら止め、さらにもう片方の手でナカジマ二等陸士を抑えている高町一等空尉の姿だった。

高町一等空尉の手からは徐々に血が下に流れている。

その姿を目の前で見ているスターズの二人は恐怖で怯えていた。

「頑張っているのはわかるけど・・・模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

声色を変えどこかオーラが違う高町一等空尉がそう呟いた。

「練習の時だけ言うことを聞いているフリで、本番でこんな危険な無茶するんなら・・・練習の意味・・・ないじゃない・・・」

そういつている間にも、ブレードを掴んでいるほうの手からは血が溢れて来ている。

「ねえ？」

「あ、あの……」

ナカジマ二等陸士が大きく目を見開きながら少し後ろへ下がる。

「私の言ってること……私の訓練……そんなに間違ってるかな？」

『Blade Erase』

ランスター二等陸士がブレードを消し、ジャンプをして後ろのウイングロードに足をつける。

そして目尻に涙を貯めながら、カートリッジを二つ使用し叫んだ。

「私はもう誰も傷つけないから！！失いたくないから！！だから……強くなりたいんです！！」

「少し……頭冷やそうか……クロスファイア……」

「うあああああああ！！ ファントムブレイズ」

「シュート」

魔力砲を放とうとしていたランスター二等陸士より先に、高町一等空尉が先に放ち直撃させた。
ランスター二等陸士がいたところは煙が立ち上がり姿が見えなくなった。

「ティアー！！ ツ！？ バインド！？」

助けに行こうと思ったナカジマ二等陸士はバインドによって動けなくなる。
そして高町一等空尉は、さらに追い討ちをかけるように2射目を放とうとしている。

「ジツとして・・・よく見てなさい」

煙が晴れてフラフラになっているランスター二等陸士の姿が薄っすらと浮かび上がる。

『Bro... What you gonna do? (兄弟・
... どうするんだ?)』

その光景を見ている最中にオルフィスが話しかけてきた。

「がむしゃらに練習だけをして・・・人の考えを読めなかったラ
ンスター二等陸士とナカジマ二等陸士はたしかに悪い・・・だけ
ど自分の意図をちゃんと明らかにしてないし、話し合っていない高
町一等空尉も・・・」

僕はすでに切れ気味だった。

自分の言いたいことだけ抜かして・・・自分の言うとおりにしな
かった結果がこれ?・・・
少し頭を冷やすのはあなたですよ・・・

「オルフィスセットアップ・・・」

セットアップを瞬時に済ませた。

高町一等空尉はすでに魔力を溜め終え、2射目を放とうとしている。

「なのはさんッ!」

ナカジマ二等陸士が叫ぶがそれを気に留めることもなく、第2射目を放った・・・

ドガアアアアアン

「なんで？・・・ ユーリ君には関係ないよね？」

ぎりぎりのところで間に割り込むことが出来た。
後ろのウイングロードの上ではランスター二等陸士が気絶し、横たわっている。

「・・・」

「喋ってくれないとわからないよ・・・ユーリ君」

「・・・自分が何をしたのかわかっているんですか？・・・ この人間風情が・・・」

「わかってないのはあなたの方です・・・ 吸血鬼・・・」

「なのはッ!!」

見守っていたハラOWN執務官が高町一等空尉のセリフに大きな声を出して割り込む。

すでに切れ気味だったのが高町一等空尉の最後のセリフによって完璧に切れた。

『吸血鬼』

僕が世界で一番嫌いな言葉・・・
それを彼女は口にしてしまった・・・
誰のために・・・ どの人間のためにここまでやっている・・・

『Ok... this is gonna be really scary... you just made him really mad lady (オツケー・・・ これはとても恐いことになってしまった・・・ 今めちゃくちゃ怒らせてしまったぞ、譲さんよ)』

「ふ、ふふ・・・ ロイド部隊長・・・ やっぱ無理ですね・・・
人間を好きになるなんて・・・」

僕は手に持っている大鎌を強く握り締め、高町一等空尉を睨んだ。
彼女のほうも相当気が立っているようで、向こうもこちらを睨み返している。

「久々にあれを使うよ・・・ オルフィス」

大鎌を片手だけで持ち、高町一等空尉に向けた。

初めて人間のためにここまでやったのに・・・ こんなことをしようと思ったのさえ初めてだったのに・・・

許さない・・・ 許さない・・・ 許さないよ・・・ 絶対に・・・

Episode 9: Who is stronger? (前書き)

最近ISことインフィニット・ストラトスの二次創作が増えてますね。

他の作者に影響されて自分も書き出しそうです・・・

しかし仮に書き出したとして3つの小説を書き続けれるとは思えない・・・

それでは 吸血鬼 VS 白い悪魔・・・
戦いの結果は・・・

Episode 9 : Who is stronger?

僕と高町一等空尉は睨みあっている。

彼女は僕に模擬戦の邪魔をされたことを怒り、僕は彼女のやり方が間違っていてそれを正そうと思い行動を取ったが・・・

『吸血鬼』

一番聞きたくない言葉が耳に入ってきた。

もちろんその言葉を発したのは彼女、高町一等空尉・・・

その言葉を聞いた瞬間、心の中から何かがスツと消えていく感じがし、もう何もかもどうでもいいように思えてきて仕方がなかった。

彼女に向けて構えていたオルフィスの形態の一つ、『ブラッドサイズフォーム』である刃の部分が黒と赤で装飾された大鎌を戻し構えなおす。

高町一等空尉は待機モードに戻していたレイジングハートを杖に戻した。

「ユウリ君も少し頭を冷やしたほうが良いみたいだね」

いつもと違い暗い口調でそう言ったが、僕はそれに聞く耳を持たなかった。

いや、彼女の声を聞こえないようにしていたのだ。

さっき僕に言った言葉は、あの夢を忘れさせるくらい僕の記憶を大きく揺らした。

「・・・ もう一度動けないほどボロボロにしたほうが良いみたいですね・・・ あのときの任務の時みたいに復帰困難にしてあげましょうか」

僕も彼女と同じく暗い口調で昔彼女に起こったことを言った。

高町一等空尉は小さい頃、ある任務で大怪我を負ってしまい魔導師として復帰困難のレベルになったことがあるのだ。

そう言った途端に高町一等空尉の目の色が変わった。

なぜそのことを知っているの、と言いたげな目をしていたがまた怒りの目へと早変わりし、さらにその目は先ほどよりも怒りの強さが現れている。

「なんでそのことを知っているか知らないけど、本当に頭を冷やす必要があるみたいだね。 ユーリ君」

高町一等空尉の魔導師ランクはリミッターをつけてA+に対し僕は本来SSの所をシングルAにダウンしてしまっている。少し差はあるけど、今の僕には負ける気がしなかった。

「ナカジマ二等陸士は早くそこで寝転がっている無能を移動させて

ください」

「は、はい！」

僕の後ろで横たわって気絶しているランスター二等陸士を指差す。バインドを解かれた彼女は走ってランスター二等陸士の元へと駆け寄り、自分の背中に乗せその場を去った。

さて邪魔な人間はいなくなっただし・・・

『Bloody Spear（ブラッディ・スピア）』

真っ赤に染まっている槍を魔力で生成し、それを投げつける。

高町一等空尉はそれを簡単に回避し、反撃を開始した。

数え切れないほどの桜色の球体を彼女の周りに作り出し、それを一斉に僕に向かって放つ。

だが、僕は空中でバックステップをしながらそれを確実に一つずつ避け、回避不可能な物は防御魔法を展開して防いだ。

反撃が止むと同時に僕はカードリッジを使った。

「オルフィス」

『Load Cartridge . Bloody Spear
Execution Burst (ロードカートリッジ。ブ
ラッディ・スピア・エクセキューションバースト)』

10・・・50・・・200・・・と次々と銃の本数が増えていき
あつという間に1000本の真つ赤な銃が生成された。

「ファイア」

僕のその声と同時に一斉に目標である高町一等空尉に向かって放た
れた。

彼女はそれを無表情のまま杖を構え・・・

「レイジングハート」

『Divine・・・(ディバイン・・・)』

「バスター・・・」

僕が放った1000本のブラッディスピアが一瞬にして彼女の砲撃
に飲み込まれ消滅してしまい、飲み込んでなお飛んできた桜色の砲
撃をすぐさまかわす。

放った直後なら隙があるはずと思い彼女の懐に入り込もうと決めたときだった。

「・・・バインドですか」

ご丁寧に両手両足にバインドが付けられた。

解除しようと試みるが、なかなか嚴重に掛けられてしまっている。

「終わりだよ、ユーリ君」

『Starlight Breaker (スターライトブレイカー)』

その声の先を見ると、高町一等空尉が魔方阵を広げ魔力を収縮していた。

見る見るその収縮されている魔力は大きくなっていく。

噂に聞く、高町一等空尉が繰り出す最強の集束砲撃魔法、スターライトブレイカー・・・

その威力はいかなる防御魔法すら無に帰すほどの威力・・・

「スター・・・ライト・・・ブレイカアアアアア！！！」

収束されていた魔力が解き放たれ、向かってきた。

僕は焦ることなく、ゆっくりと目を閉じた。

諦めた訳じゃない・・・むしろこれからが本番だ・・・
彼女をボコボコにするためのね・・・

「リミット・・・ブレイク」

なのはSide

「スター・・・ライト・・・ブレイカアアアアアアア！」

私は躊躇なく撃ってしまった。

大切な友達のはずなのに、彼に否定されたことにショックで身も心も怒りに任せてしまっていた。

解き放ったスターライトブレイカーはバインドで拘束したユーリ君を飲み込もうとしたときある異変が起きたんだ。

私が放った魔力がすべて一点集中して行き、吸収されているんだ。

「一体何が起こって」

解き放ったスターライトブレイカーは全てユーリ君の形が変わった
デバイスによって吸収されてしまった。
変わったのはデバイスだけではない、ユーリ君自信もどこか変わっ
ている感じがして仕方がなかったんだ。

「ユーリ君何をしたのかな・・・」

そう質問するが何も答えてはくれない。
ユーリ君は瞑っていた目をゆっくりと開いた。
その目にはいつもの漆黒の黒い目ではなく・・・

「赤・・・？」

赤と言ってもただの赤色ではなく、赤ワインの様に澄んでいて暗闇
の中でもわかるような感じだった。
そして何よりもその目に吸い込まれそうな心地が良い感じがした。

なのはSide Out

久しぶりに戻った。

この忌々しい元の姿に。

先ほどと違い心臓の音はゆっくりと安定したりリズムを刻んでいて、物事を冷静に判断できる。

そして、きっと今僕の目は変色しているのだろう。

そうこれが僕の本当の姿……

みんなが恐れた『吸血鬼』……

そして僕の本当の姿を見せてしまおうと同時にオルフィスのもう一つの姿まで見せるはめになった。

オルフィスのもう一つの姿あり、最終形態『フォルティシモ・フォーム』

鮮血の血の色のしたポールアームであり、まず最初に印象付けられるのがその大きさ。

僕の身長が小さいからとも言えるが、大きさが僕の二倍ほどある。ちなみにポールアームとは、長い柄の先端に攻撃用の武器が備えられている物のことで、オルフィスのフォルティシモ・フォームの場合は先端に斧と刀を二つに割って一つにしたものが取り付けられている。

まあ、雑刀と言った方が一番シンプルかもしれない。

元々、このフォルティシモ・フォームは高町一等空尉相手だと使うことになるのは予想していたけど、なるべく使いたくはなかった。今見ている人が高町一等空位尉とハラOWN執務官だけなのがせめ

てもの救いだ。

他の人達と言うと恐らくヴィータ副隊長が避難させたのだろう。

「見られたのが悪女二人だっただけましか・・・ はあ」

二人でも見られたには変わりはないので思わず大きなため息をついてしまう。

「もういいです。 奏でましょう・・・ 破滅への旋律を今・・・」

薙刀の 先端についている排出口から吸収した高町一等空尉の魔力が僕の魔力と混じりあいながら噴出し始めた。

「ドレイン・スペルパワーで吸い取った分を僕の力に上乗せするよ」

『A l r i g h t B r o (了解) 』

僕の今の心の痛みを思い知らせてあげます。

オルフィスの了承の声が聞こえると同じタイミングで僕は動いた。吸血鬼の姿に戻ったから、身体能力はいつもの数倍でさらにその上からフォルティシモ・フォームと高町一等空尉の魔力が上乗せされ

ているので体が尋常じゃないくらい軽い。

彼女が一回瞬きする間に僕は彼女の目の前に移動した。

「ッ!？」

本当に一瞬の出来事なので高町一等空尉は息を呑んでいた。
急いで防御魔法を展開する高町一等空尉だが・・・

「・・・そんな紙切れ」

そのまま薙刀を力一杯振り、防御魔法が粉々に砕け散り風邪に乗って消えていった。

その後も僕の攻撃は続く。

防御魔法をそのまま貫通し高町一等空尉を近くにあつたビルまで吹き飛ばしたのだ。

ビルの壁は崩れ落ち、彼女は体と地面が擦れていくように地面を転がっていく。

「まだ終わりませんよ・・・ オルフィス」

「Wait! you gonna use (待て! まさかあれを)」

「関係ない僕は今切れてるんだ」

『But! (だけど!) 「・・・行くよ」 grrrr・・・
Blood Burn Destruction (あーもうッ
! ブラッド・バーン・デストラクション)』

薙刀を高町一等空尉が突っ込んで行ったビルに向ける。

薙刀から放出される魔力の粒子の量が先ほどよりも多くなり、それが集結し大きな紅蓮の塊を作り出す。

彼女は僕に躊躇なく撃った。

だから僕も躊躇なく撃たせてもらう。

『Ready Bro (準備できた)』

一つの大きな魔力の塊が完成した。

大半紅蓮の色で染まっているがところどころ桜色の魔力が見える。

「自分の思いも伝えず・・・言いたいことばかり抜かして・・・
さらには巻き添えで吸血鬼呼ばわりですか・・・」

穴の開いたビルの壁からよたよたになった高町一等空尉が見えた。

バリアジャケットが所々破けていて、戦意喪失している。

それでも関係ない・・・

少し心を許しそうになっ たらこれだ・・・

人間なんて・・・

「・・・ブラッド・バーン・デストラクション」

収束していた紅蓮の魔力がビルを包み込み・・・

ドガアアアアアン

そのビルは消えうせ、その代わりに大きなクレーターが出来上がった。

クレーターの中心では高町一等空尉がさっきよりもボロボロになり横たわっている。

彼女の元へゆっくりと近づいていき、気絶している彼女の首を鷲づかみした。

「う、うつっ・・・」

気絶しているのかと思いきやまだ意識があるようだ。

ガサツ、ガサツ

後ろから足音が聞こえてきた。

「クロスフォードさん！ もうやめてください！！」

ハラオウン執務官が半分泣きながら駆け寄ってきた。

彼女は僕が高町一等空尉を驚つかみしている腕を強く握り締め、高町一等空尉を離させようと力を込める。

僕は・・・ 本当にお人よしです・・・

「・・・ もうこれ以上は痛めつけませんよ。 邪魔なので離れてください」

「今のクロスフォードさんを私は信じることも出来ないよッ！」

ついに大粒の涙が彼女の頬をつたう。

ズキンッ

な、何？・・・ この痛み・・・

心臓が・・・痛い？

「・・・退いて下さい。僕にはやる事があるんです」

赤く染まってしまった目でハラウン執務官を睨み付ける。
その目を見た彼女は体を小さく揺らし、僕の腕を掴んでいた手をゆつくりと離し1歩、2歩と下がっていく。

首を掴み持ち上げていた高町一等空尉をそつと地面に寝かせた。
気がつくと彼女は完璧に気絶してしまっていた。

「レイジングハート、バリアジャケットを解除して」

『What are you going to do (何をなさるつもりですか)』

「・・・治癒を・・・ね」

数秒後レイジングハートはバリアジャケットを解除してくれた。

バリアジャケットを解除させた理由は本当に治癒をするためだ。

僕は素肌が見えている首元に目を瞑りながらゆっくりと顔を近づけていき、そして・・・

カプッ

口を付けた。

歯が高町一等空尉の皮膚を貫くが血は出ていないし、恐らく痛みもないはず。

僕の体はゆっくりと紅蓮の魔力に包まれていき、それが少しずつ彼女の体内に入っていく。

すると、見る見るうちに高町一等空尉のキズが治っていき、ボロボロだった肌も元の綺麗な肌に戻っている。

数分後・・・

彼女の体内に僕の魔力を送りこむことがようやく終わり、今彼女は安らかに眠っている。

一方僕は、リミットブレイク、自分が扱える最大級の魔法、さらには治癒のために使用した魔力のお陰で体がフラフラになってしまった。

「・・・はあ、終わりました」

「クロスフォードさん・・・ どうして割り込んだんですか？」

「・・・どうして・・・でしょうね」

いつもの僕なら放っておいただろうけど、今回は無性に納得がいかなかった。

安らかに寝ている高町一等空尉の顔を見ながら考えていると、

ドクン、ドクン！

「ぐッ！」

ま、また・・・

血を・・・ 欲してる・・・

く、くそっ

「く、クロスフォードさん？」

「は、早く高町一等空尉を・・・ 僕は、もう少しここに・・・」

「で、でも顔色が良くないよ？」

手で額を拭くと冷や汗をかいているのがわかる。

「い、いいですから早く」

ハラウン執務官は心配そうな顔をしながら高町一等空尉を背負い戻っていった。

彼女達が遠ざかっていっても体がまだ血を欲しがっていた。鼓動はどんどん早くなっていき、息も荒くなっていく。

ち、力を、使いすぎ・・・た・・・

僕はその場で力尽きて倒れてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3665q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ The Alone Vampire ~

2011年11月16日18時14分発行